



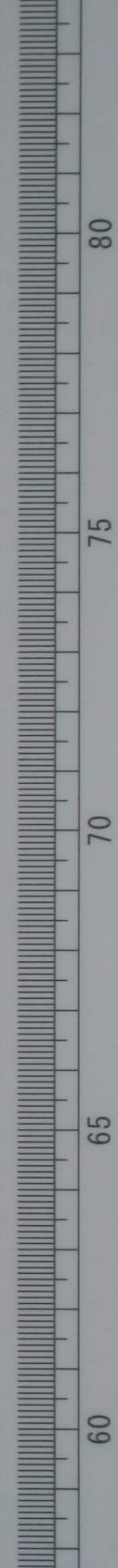
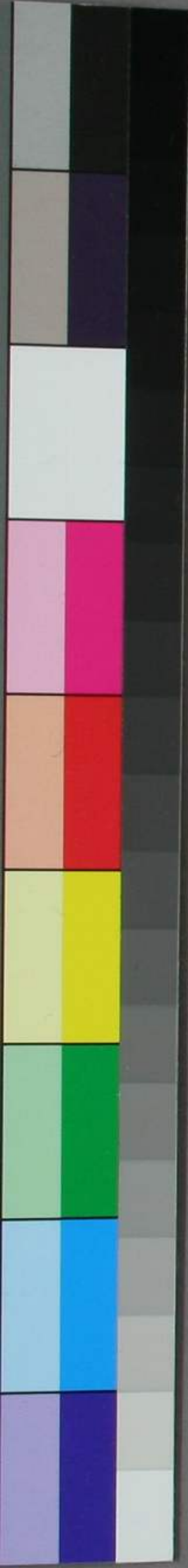
萩原朔太郎詩集



第一書房

萩原朔太郎詩集



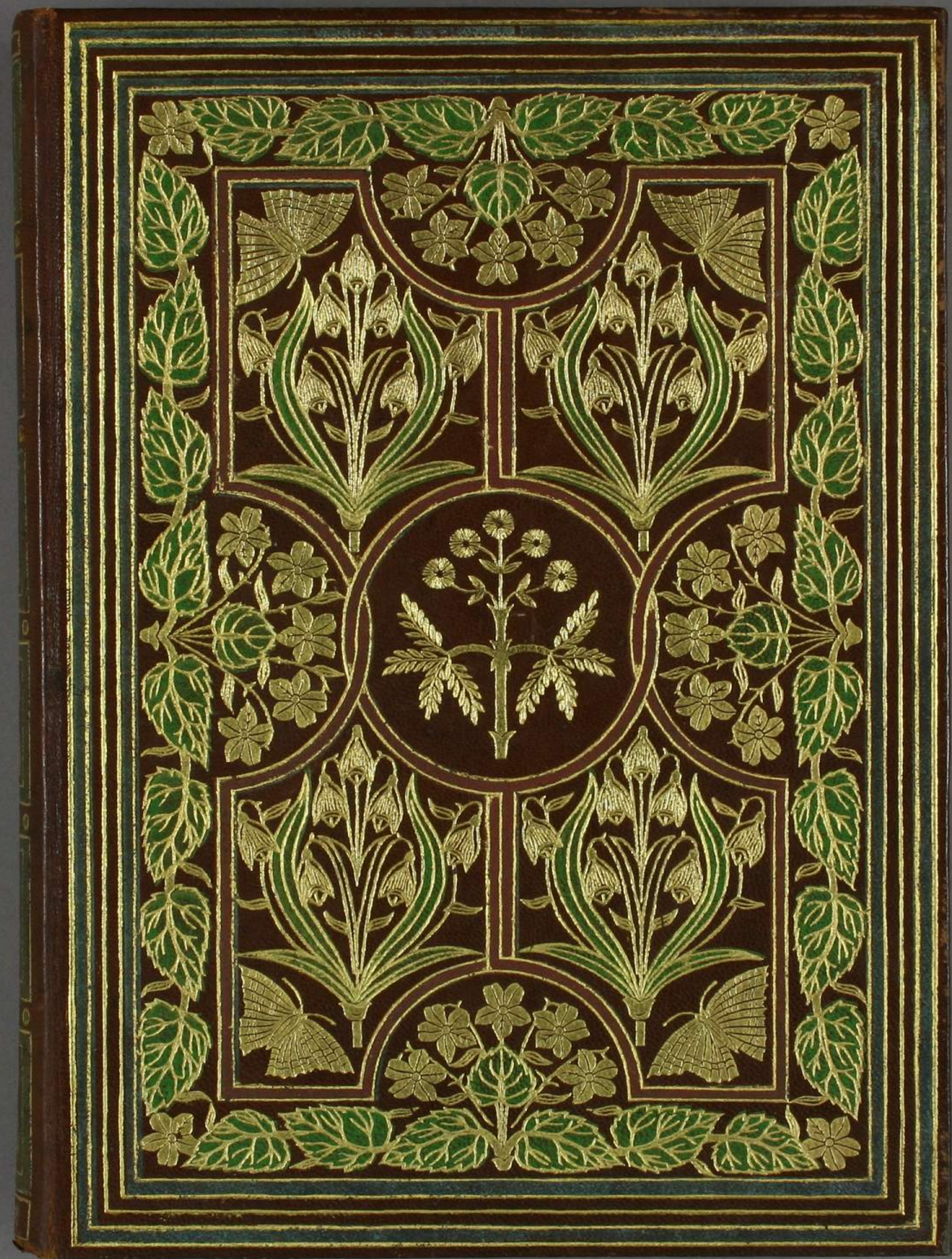


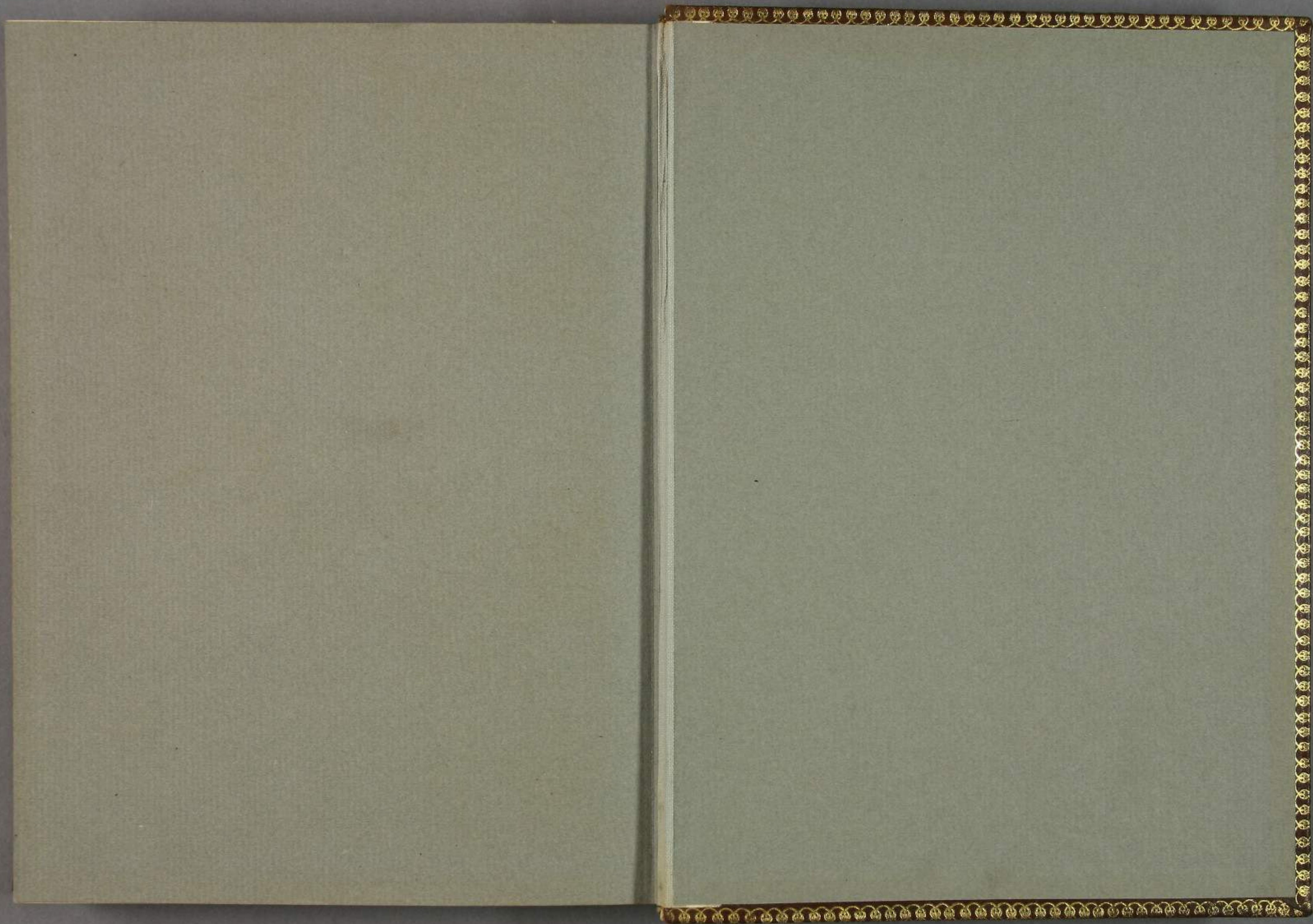


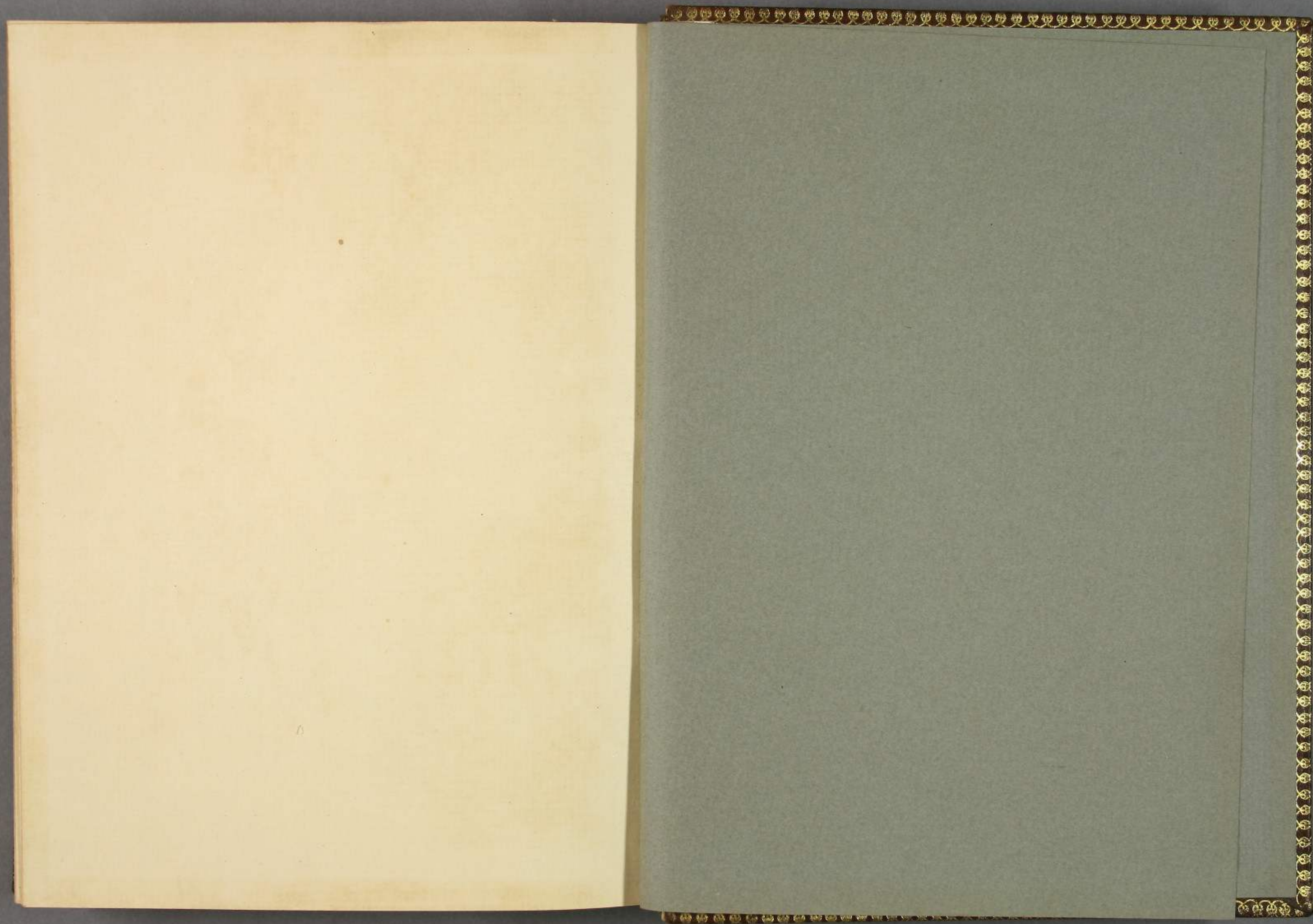
萩原朔太郎詩集

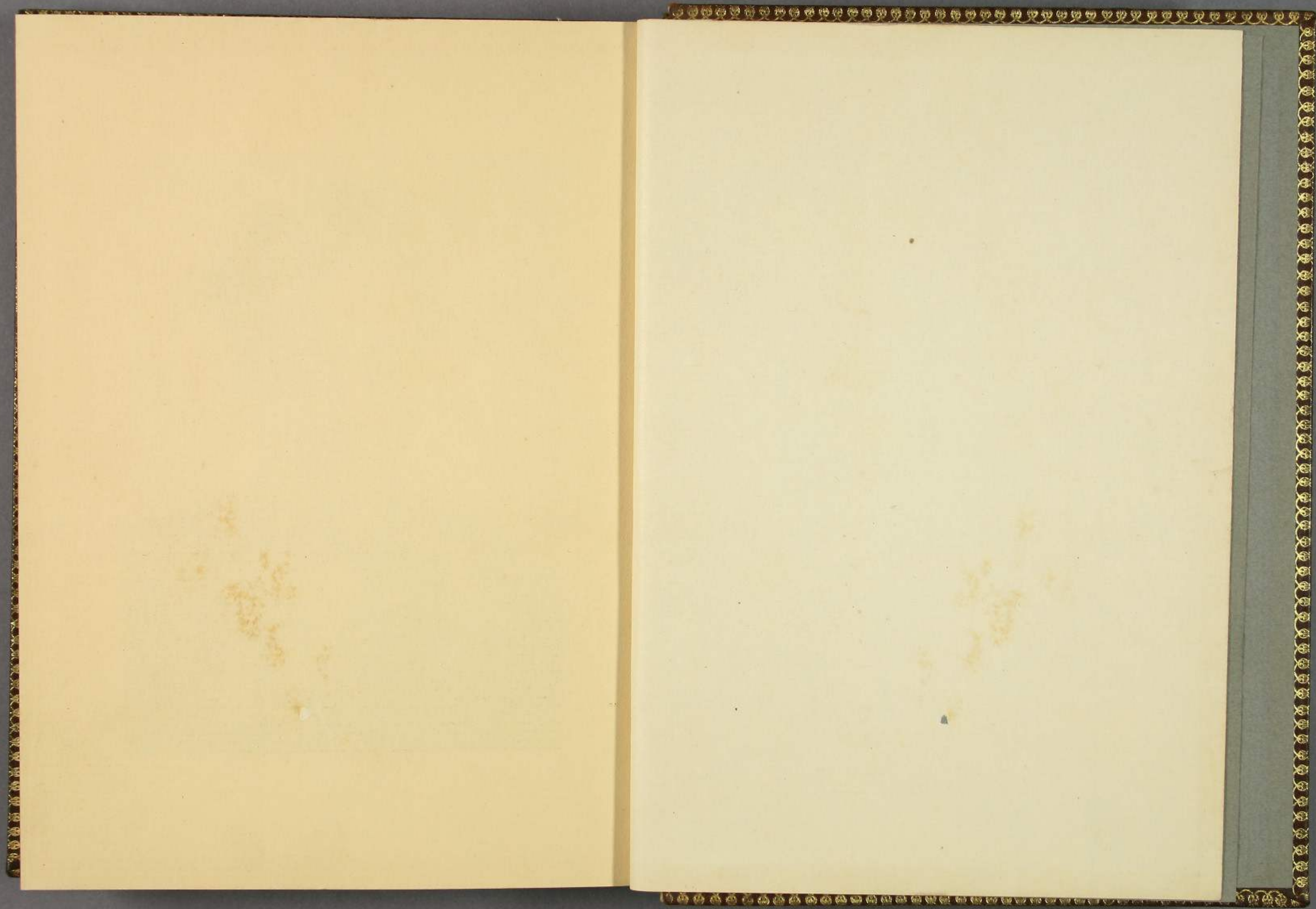


第一書房











S. Hagi Wada

1924

[Signature]

萩原朔太郎詩集

著郎太朔原萩
集詩郎太朔原萩

輪高京東

房書一第

年八十二百九千

序

詩は學問でもなく技藝でもない。詩は時々燃焼して行く生命の記録、主觀の思ひ逼つた「訴へ」に外ならない。

處で學問や技藝ならば、修養によつて日々に進歩を重ねることが有り得るだらう。然るに詩は學問や技藝でないから、詩人の經歷に成長といふことは有り得ない。詩人は幾年詩を作つても同じことで、今日の詩が昨日の詩にまさるといふやうなことは全くない。もしそんなことを考へる詩人があれば、一の悲しき人間的な錯覺である。なぜといつて生命は不斷に流動し變化して行く。いかなる生命も、決して同じ一の港に長く留つてゐない。生命は錨をもたない船であつて、一瞬時も同じ處に滯つてゐないのである。生命は流れてゐる。昨日の感情は今日の思ひでなく、昨日の

價值は今日の價值とちがつてゐる。そして進歩とは——成長とは——一つの標準すべき價值の上に、深く根付いた木の枝葉をひろげて行くことに外ならない。錨をもたない船、根をもたない流動の生命が、いかにして成長することがあり得ようか。

生命には成長がない。人の年老いて行くことを、たれが成長と考へるか。老は成長でもなく退歩でもない。ただ「變化」である。一の港から他の港へ、船が流れて行く潮の變化である。然り！生命はただ變化である。人生の様々なる季節につれて、春から夏へ、夏から秋へと、自然の空や、空氣や、林やの色が變つてくるやうに、人の生命もまたいろいろに移つてくる。だれが四季の價值を論じ得るか？春と、夏と、秋と、冬の季節の優劣を評價し得る基準がどこにあるか。各の季節の自然は、各の特殊な美と必然を有してゐる。だれが四季の變化を以て曆數の進歩と言ふか？進歩はどこにもない。實にあるものはただ變化のみ。虹の、雲の、夕映の、さまざまなる色の移り行く變化のみ。生命は！

されば詩には進歩がない。詩人の生涯には成長がない。詩人はただ時々に変化する。青蟲が蛹となり、蛹が轉じて蝶類となるやうに、詩人もその生涯を通じて變化する。我々が蝶となつた時、我々はもはや再度青蟲の貪婪どんらんを繰返さず、彼等の悲しき歌を唄はうとしないだらう。私は過去にすくなくとも三期の變態をした。「哀憐詩篇時代」「月に吠える時代」そして「青猫時代」である。今、私はさらに一の新しき變化をするため、古き殻を脱がうとしてもがいてゐる。私はまた變るであらう。けれども「力」が、尙ほ充分に感じられる朝まで、しばらく地下に冬眠する蛹とならう。私は尙弱い。日光は空に暗く、生えない翅が殻の中でかぢかんでゐる。

詩人の生涯は變化である。私には成長もなく進歩もない。長い過去の生涯は、私の藝術にとつて一の増すものもなく減るものも残さなかつた。私は昔あつたやうに、今日も尙ほ幼く未熟の初學詩人にすぎないのだ。私は何等の「藝術」をも持つてゐない。ただ生命の浪の移り行く過去の LIFE の「記録」を持つてゐるにすぎないのだ。私は一切の過去の詩を集めて、これらの貧しき記録を編輯した。もとより過ぎ行く利根川の水の中に、一切を破つて棄つべきものであるか知れない。ただ切に

感ずるものは非力である。無才にして詩を思ひ、力なくして人生に戦はうとする悲哀である。

四

我れの叛きて行かざる道に
新しき樹木皆伐られたり。

ともあれ此處に、私の「恥かしき存在」を編輯した。これを以て一切の過去に告别する。もはや再度、私の「青猫」や「月に吠える」を繰返すことをしないだらう。私は歎きつつ、悲しみつつ、さらに新しき道路に向つて、非力の踏み出しをしようと構へてゐる。

西曆一九二八年二月

大森馬込村の新居にて

萩原朔太郎

凡例

自分は過去に四冊の詩集を出版してゐる。「月に吠える」「青猫」「蝶を夢む」「純情小曲集」である。そこでこの全集には、此等の全部をまとめて一冊に綜合した。

「青猫」出版後に作つた最近の詩が約三十篇ほどもある。この中、郷土望景詩篇に属するもの十篇は、最近「純情小曲集」の一部に入れて刊行したが、他の二十篇ほどの詩は、時々の雑誌に載せたのみで、未だまとまつた書物としては出してゐなかつた。よつてこの全集の刊行を機會として、集中の後篇「青猫以後」の部に編入した。

編輯の順序は、大體に於て創作年代によることにした。即ち編を別けて「哀憐詩篇時代」「月に吠える時代」「青猫時代」「青猫以後」の四期に分類し、さらにその各編を前期と後期とに對別した。しかしその各編における箇々の詩の排列は、必ずしも創作順序によつてゐるのではない。箇々の詩の排列順序はでためである。ただ大體に於て、同じ時期の創作に属するものを、できるだけ同じ編の項中に類屬させた。故に大體に於てみれば、過去における自分の詩作経歴が、目次の順序通りに展開されてゐるわけである。

愛憐詩篇

夜汽車

有明のうすらあかりは
硝子戸に指のあとつめたく
ほの白みゆく山の端は
みづがねのごとくにしめやかなれども
まだ旅人とのねむりさめやらねば
つかれたる電燈のためいきばかりこちたしや。
あまたるきにすのにほひも

そこはかとなき葉巻煙草の煙さへ
夜汽車にてあれたる舌には佗しきを
いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ。
まだ山科は過ぎずや
空氣枕の口金をゆるめて
そつと息をぬいてみる女ごころ。
ふと二人かなしさに身をすりよせ
しののめちかき汽車の窓より外をながむれば
ところもしらぬ山里に
さも白く咲きてゐたるをだまきの花。

こころ

こころをばなにとたとへん
こころはあぢさゐの花
ももいろに咲く日はあれど
うすむらさきの思ひ出ばかりはせんなくて。

こころはまた夕闇の園生のふきあげ
音なき音のあゆむひびきに

こころはひとつによりて悲しめども
かなしめどもあるかひなしや
ああこのこころをばなにとたとへん。

こころは二人の旅びと
されど道づれのたえて物言ふことなければ
わがこころはいつもかくさびしきなり。

女よ

うすくれなるにくちびるはいろごられ
粉おしろいのほひは襟脚に白くつめたし。

女よ

そのごむのごとき乳房をもて
あまりに強くわが胸を壓するなかれ
また魚のごときゆびさきもて

あまりに狡猾にわが背中をばくすぐるなかれ

女よ

ああそのかぐはしき吐息もて
あまりにちかくわが顔をみつむるなかれ

女よ

そのたはむれをやめよ
いつもかくするゆゑに
女よ 汝はかなし。

櫻

一四

櫻の下に人あまたつどひ居ぬ
なにをして遊ぶならむ。

われも櫻の木の下に立ちてみたれども
わがところはつめたくして

花びらの散りておつるにも涙こぼるるのみ。

いとほしや

いま春の日のまひるとき

あながちに悲しきものをみつめたる我にしもあらぬを。

旅 上

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背廣をきて

きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくとき

みづいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月の朝のしのめ

うら若草のもえいづる心まかせに。

一五

金魚

金魚のうろこは赤けれども
その目のいろのさびしさ。
さくらの花はさきてほころべども
かくばかり
なげきの淵たふに身をなげすてたる我の悲しさ。

静物

静物のこころは怒り
そのうはべは哀しむ
この器物ぶつの白き腫かにうつる
窓ぎはのみどりはつめたし。

涙

ああはや心をもつはらにし
われならぬ人をしたひし時は過ぎゆけり。
さはさりながらこの目また心悲しく
わが涙せきあへぬはいかなる戀にかあるらむ

つゆばかり人を憂しと思ふにあらねども
かくありて敷物の上に涙こぼれしをいかにすべき。
ああげに今こそわが身を思ふなれ
涙は人のためならで
我のみをいとほしと思ふばかりに嘆くなり。

蟻地獄

ありぢごくは蟻をとらへんとて
おとし穴の底にひそみかくれぬ
ありぢごくの婪貪たんごんの瞳ひとまに
かげろふはちらりちらりと燃えてあさましや。
ほろほろと砂のくづれ落つるひびきに

ありぢごくはおどろきて隠れ家をはしりいづれば
なにかしらねどうす紅く長きものが走りて居たりき。
ありぢごくの黒い手脚に
かんかんと日の照りつける夏の日のまつびるま
あるかなきかの蟲けらの落す涙は
草の葉のうへに光りて消えゆけり。
あとかたもなく消えゆけり。

利根川のほとり

きのふまた身を投げんと思ひて
利根川のほとりをさまよひしが
水の流ればやくして
わがなげきせきこめるすべもなければ
おめおめと生きながらへて

今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。
きのふけふ
ある甲斐もなきわが身をばかくばかりいとしと思ふうれしさ
たれかは殺すとすものぞ
抱きしめて 抱きしめてこそ泣くべかりけれ。

濱邊

若ければその瞳も悲しげに
ひとりはなれて砂丘を降りてゆく。
傾斜をすべるわが足の指に
くづれし砂はしんと落ちきたる
なにゆるるの若さぞや
この身の影に咲きいづる時無草もうちふるる

若き日の嘆きは貝殻もてすくふよしもなし。
ひるすぎて空はさあをにすみわたり
海はなみだにしめりたり
しめりたる浪のうちかへす
かの遠き渚に光るはなにの魚ならむ。
若ければひとり濱邊にうち出でて
音もたてず洋紙を切りてもてあそぶ
このやるせなき日のたはむれに
かもめどり涯なき地平をすぎ行けり。

縁 蔭

朝の冷し肉は皿につめたく
せりいはさかづきのふちにちちと鳴けり
夏ふかきえにしだの葉蔭にかくれ
あづまやの籐椅子によりて二人なにをかたらむ。
さんさんとふきあげの水はこぼれちり
さふらんは追風にしてにほひなじみぬ。
よきひとの側へにありてなにをかたらむ

すずろにもわれは思ふゑねちやのかあにばるを
かくもやさしき君がひとみに
海こえて燕雀のかげもうつらでやは。
もとより我等のかたらひは
いとうすきびいどろの玉をなづるがごとし
この白き敷石をぬらしつつ
みどり葉のそよげる影をみつめれば
君やわれや
さびしくもふたりの涙はながれ出でにけり。

再會

皿にはをどる肉さかな

春夏すぎて

きみが手に銀のふほをくはおもからむ。

ああ秋ふかみ

なめいしにこほろぎ鳴き

ええてるは玻璃をやぶれご

再會のくちづけかたく凍りて

ふんするはみ空のすみにかすかなり。

みよあめつちにみづがねながれ

しめやかに皿はすべりて

み手にやさしく腕輪はづされしが

眞珠ちりこぼれ

ともしび風にぬれて

このにほふ敷石はしろがねのうれひにめざめむ。

地上

地上にありて

愛するものの伸長する日なり。

かの深空にあるも

しづかに解けてなごみ

燐光は樹上にかすかなり。

いま遙かなる傾斜にもたれ

愛物どもの上にしも

わが輝やく手を伸べなんとす
うち見れば低き地上につらなり
はてしなく耕地ぞひるがへる。
そこはかと愛するものは伸長し
ばんぶつは一所いっしょにあつまりて
わが指さすところを凝視せり。
あはれかかる日のありさまをも
太陽は高き真空にありておだやかに観望す。

花鳥

花鳥の日はきたり
日はめぐりゆき
都に木の芽ついはめり
わが心のみ光りいで
しづかに水脈をかきわけて
いまぞ岸邊に魚を釣る。

川浪にふかく手をひたし
そのうるほひをもてしたしめば
かくもやさしくいだかれて
少女子どもはあるものか。
ああうらうらともえいでて
都にわれのかしまだつ
遠見にうかぶ花鳥のけしきさへ。

初夏の印象

昆虫の血のながれしみ
ものみな精液をつくすにより
この地上はあかるくして
女の白き指よりして
金貨はわが手にすべり落つ。

時しも五月のはじめつかた
幼樹は街路に泳ぎいで
びよびよと芽生は萌えづるぞ。
みよ風景はいみじくながれきたり
青空にくつきりと浮びあがりて
ひとびとのかげをしんにあきららかに映像す。

洋銀の皿

しげる草むらをたづねつつ
なにをほしさに呼ばへるわれぞ
ゆくゆく葉うらにささくれて
指も真紅にぬれぬれぬ
なほもひねもすはしりゆく
草むらふかく忘れつる

洋銀の皿をたづね行く。
わが哀しみにくるめける
ももいろうすき日のしたに
白く光りて涙ぐむ
洋銀の皿をたづねゆく。
草むら深く忘れつる
洋銀の皿はいづこにありや。

月光と海月

月光の中を泳ぎいで
むらがるくらげを捉へんとす
手はからだをはなれてのびゆき
しきりに遠きにさしのべらる
もぐさにまつはり
月光の水にひたりて

わが身は玻璃のたぐひとなりはてしか
つめたくして透きとほるもの流れてやまざるに
たましひは凍えんとし
ふかみにしづみ
溺るるごとくなりて祈りあぐ。

かしこにここにむらがり
さ青にふるゑつつ
くらげは月光のなかを泳ぎいづ。

月に吠える
(前期)

天上縊死

遠夜に光る松の葉に
懺悔の涙したたりて
遠夜の空にしも白ろき
天上の松に首をかけ。
天上の松を戀ふるより
祈れるさまに吊されぬ。

地面の底の病氣の顔

地面の底に顔があらはれ

さみしい病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみに

うらうら草の莖が萌えそめ

鼠の巢が萌えそめ

巢にこんがらかつてゐる

かずしれぬ髪の毛がふるゑ出し

冬至のころの

さびしい病氣の地面から

ほそい青竹の根が生えそめ

生えそめ

それがじつにあはれふかくみえ

けぶれるごとくに視え

じつに、じつに、あはれふかげに視え。

地面の底のくらやみに

さみしい病人の顔があらはれ。

竹

ますぐなるもの地面に生え
するどき青きもの地面に生え
凍れる冬をつらぬきて
そのみどり葉光る朝の空路に

なみだたれ
なみだをたれ
いまはや懺悔をはれる肩の上より
けぶれる竹の根はひろごり
するどき青きもの地面に生え。

草の莖

冬のさむさに
ほそき毛をもてつつまれし
草の莖をみよや。
あをらみ莖はさみしげなれども
いちめんとうすき毛をもてつつまれし
草の莖をみよや。

雪もよひする空のかなたに
草の莖はもえいづる。

山居

八月は祈禱
魚鳥遠くに消え去り
桔梗いろおとろへ
しだいにおとろへ
わが心いたくおとろへ
悲しみ樹蔭をいはず
手に聖書は銀となる。

竹

光る地面に竹が生え

青竹が生え

地下には竹の根が生え

根がしだいにほそらみ

根の先より繊毛が生え

かすかにけぶる繊毛が生え

かすかにふるゑ。

かたき地面に竹が生え

地上にするどく竹が生え

まつしぐらに竹が生え

凍れる節節りんと

青空のもとに竹が生え

竹、竹、竹、が生え。

醋えたる菊

その菊は醋え
その菊は痛みしたたる
あはれあれ霜つきはじめ
わがぶらちなの手はしなへ

するとく指を尖らして
菊をつまむとねがふより
その菊をばつむことなかれとて
かがやく天の一方に
菊は病み
醋えたる菊はいたみたる。

龜

林あり
沼あり
蒼天あり
ひとの手にはおもみを感じ

しづかに純金の龜のねむる。
この光る
寂しき自然のいたみにたへ
ひとの心^{こころ}靈にまさぐりしづむ
龜は蒼天のふかみにしづむ。

笛

あふげば高き松が枝に琴かけ鳴らす
をゆびに紅をさしぐみて
ふくめる琴をかきならす
ああかき鳴らすひとつま琴の音にもつれぶき

いみじき笛は天にあり。
けふの霜夜の空に冴え冴え
松の梢を光らして
かなしむもの一念に
懺悔の姿をあらはしぬ。
いみじき笛は天にあり。

冬

つみとがのしるし天にあらはれ
ふりつむ雪のうへにあらはれ
木木の梢にかがやきいで
ま冬をこえて光るがに

おかせる罪のしるしよもに現れぬ。

みよや眠れる

くらき土壌にいきものは
懺悔の家をぞ建てそめし。

卵

いと高き梢にありて
ちひさなる卵ら光り
あふげば小鳥の巢は光り
いまはや罪びとの祈るときなる。

天景

しづかにきしれ四輪馬車
ほのかに海はあかるみて
夢は遠きにながれたり
しづかにきしれ四輪馬車。
光る魚鳥の天景を
また窓青き建築を
しづかにきしれ四輪馬車。

感傷の手

わが性のせんちめんたる
あまたある手をかなしむ。
手はつねに頭上にをどり
また胸にひかりさびしみが
しだいに夏おとろへ

かへれば燕はや巢を立ち
大麥はつめたくひやさる。
ああ都をわすれ
われすでに胡弓を弾かず
手ははがねとなり
いんさんとして土地を掘る
いぢらしき感傷の手は土を掘る。

殺人事件

とほい空でびすとるが鳴る

またびすとるが鳴る

ああ私の探偵は玻璃の衣裳をきて

こひびとの窓からしのびこむ。

床は晶玉

ゆびとゆびとのあひだから

まつさをの血がながれてゐる。

かなしい女の屍體のうへで

つめたいきりぎりすが鳴いてゐる。

しもつき上旬じじめのある朝

探偵は玻璃の衣裳をきて

街の十字巷路よつちやを曲つた。

十字巷路に秋のふんする

はやひとり探偵はうれひをかんず。

みよ遠いさびしい大理石の歩道を

曲者くせものはいつさんにすべつてゆく。

盆景

春夏すぎて手は琥珀

瞳は水盤にぬれ

石はらんすゐ

いちいちに愁ひをくんず

みよ山水さんすいのふかまに

ほそき瀧ながれ

瀧ながれ

ひややかに魚介はしづむ。

雲雀料理

ささげまつるゆふべの愛餐

燭に魚蠟のうれひを薫じ

いとしがりみどりの窓をひらきなむ。

あはれあれみ空をみれば

さつきはるばると流るるものを

手にわれ雲雀の皿をささげ

いとしがり君がひだりにすすみなむ。

掌上の種

われは手の上に土を盛り
土のうへに種をまく
いま白きじょうろもて土に水をそそぎしに
水はせんせんとふりそそぎ
土のつめたさはたなごころの上にぞしむ。

ああとほく五月の窓をおしひらきて
われは手を目光のほとりにさしのべしが
さわやかなる風景の中にしあれば
皮膚はかぐはしくぬくもりきたり
手のうへの種はいとほしげにも呼吸づけり。

苗

苗は青空に光り
子供は土地を掘る。

生えざる苗をもとめむとして
あかるき鉢の底より
われは白き指をさしぬけり。

焦心

霜ふりてすこしつめたき朝を
手に雲雀料理をささげつつ歩みゆく少女あり。
そのとき並木にもたれ
白粉もてぬられたる女のほそき指と指との隙間をよくよく窺ひ
このうまさき雲雀料理をば盗み喰べんと欲して
しきりにも焦心し
あるひとのごときはあまりに焦心し
まつたく合掌せるにおよべり。

狼

見よ

來る

遠くよりして疾行するものは銀の狼

その毛には電光を植ゑ

いちねん牙を研ぎ

遠くよりしも疾行す。

ああ狼のきたるにより

われはいたく怖れかなしむ

われはわれの肉身の裂かれ鋼鐵はがねとなる薄暮をおそる。

きけ淺草寺せんそうじの鐘いんいと鳴りやまず

そぞろにもわれは畜生の肢體をおそる

怖れつねにかくるるにより

なんびとも素足をみず

されば都にわれの過ぎ來し方を知らず

かくしもおとろへしけふの姿にも

狼は飢ゑ牙をとぎて來れるなり。

ああわれはおそれかなしむ

まことに混鬧の都にありて

すさまじき金屬の

疾行する狼の登音あのこをおそる。

松葉に光る

燃えあがる

燃えあがる

あるみにうむのもえあがる

雪ふるなべにもえあがる

松葉に光る

縊死の屍體のもえあがる

いみじき炎もえあがる。

懺悔

あるみにうむの薄き紙片に

すべての言葉はしるされたり

ゆきぐもる空のかなたに罪びとひとり

ひねもす齒がみなし

いまはやいのち凍らんとするぞかし。

ま冬を光る松が枝に

懺悔のひとの姿あり。

天路巡歴

おれはかんがへる
おれの長い歴史から
なにをして来たか
なにを學問したか
なにを見て来たか。
いつさいは祕密だ
だがなんて青い顔をした奴らだ

おれの腕にぶらさがつて
蛇のやうにつるんでゐた奴らだ
おれは決して忘れない
おれの長い歴史から
あいつらは
死よりもおそろしい祕密だ。
おれはかんがへる
そのときまるであいつらの眼が
おれの手くびにくつついてゐたことを
おれの胴體に

のぞきめがねを仕掛けた奴らだ
おれをひつはたく
おれの力は
馬車馬のやうにひつはたく。

そしてだんだんと
おれは天路を巡歴した
異様な話だが
おれはじつさい 獨身者であつた。

有害なる動物

犬のごときものは吠えることにより
鶯鳥のごときものは畸形兒なることにより
狐のごときものは夜間に於て發光することにより
龜のごときものは凝晶することにより
狼のごときものは疾行することによりてさらに甚だしく
すべて此等のものは人身の健康に有害なり。

輝やける手

おくつきの砂の中より
けちえんの手くびは光る
かがやく白きらうまちずむの死蠟の手
指くされども
らうらんと光り哀しむ。
ああ故郷にあればいのち青ざめ

手にも秋くさの香華おとろへ
青らみ肢體に螢を點じ
ひねもす墓石にいたみ感ず。
みよ おくつきに銀のてぶくろ
かがやき指はひらかれ
石英の腐りたる
われが烈しき感傷に
けちえんのらうまちずむの手は光る。

白
夜

夜霜まぢかくしのびきて
登あのこ音をぬすむ寒空さむぞらに
微光ひかりのうすものすぎさる感じ
ひそめるものら

遠見の柳をめぐり出でしが
ひたひたと出でしが
見よ 手に銀の兎器は研え
闇に研え
あきらかにしもかざされぬ
そのものの額ひたひの上にかざされぬ。

巢

竹の節はほそくなりゆき
竹の根はほそくなりゆき
竹の纖毛は地下にのびゆき
錐のごとくなりゆき

絹絲のごとくかすれゆき
けぶりのやうに消えさりゆき。

ああ髪のもみだれみだれし
暗き土壤に罪びとは
懺悔の巢をぞかけそめし。

夜の酒場

夜の酒場の
暗緑の壁に
穴がある。
かなしい聖母の額
額の裏に
穴がある。

ちつほけな
黄金蟲のやうな
祕密の
魔術のぼたんだ。
眼をあてて
そこから覗く
遠くの異様な世界は
妙なわけだが
だれも知らない。
よしんば

酔つはらつても

青白い妖怪の酒盃さかづきは

「未知」を語らない。

夜の酒場の壁に

穴がある。

月夜

へんてこの月夜の晩に

ゆがんだ建築の夢と

酔つはらひの圓筒帽子しやくぼうし。

見えない兇賊

九〇

両手に兇器

ふくめんの兇賊

往來にのさばりかへつて

木の葉のやうに

ふるゑてゐる奴。

いつしよけんめいでみつめてゐる

みつめてゐるなにのもかを

だがかはいさうに

奴め 背後うしろに氣がつかない。

背後には未知の犯罪

もうもうとしてゐる黒の板塀。

夜目にも光る

白銀しろがねの服を著きこんだ奴

この奇態な

それでゐて

みたものもない片目の兇賊。

九一

游 泳

浮びいづるごとくにも
その泳ぎ手はさ青なり
みなみをむき
なみなみのながれははしる。

岬をめぐるみづのうへ
みな泳ぎ手はならびゆく。
ならびてすすむ水のうへ
みなみをむき
沖合にあるもいつさいに
祈るがごとく浪をきる。

瞳孔のある海邊

地上に聖者あゆませたまふ
烈日のもと聖者海邊にきたればよする浪々
浪々砂をとぎさるうへを
聖者ひたひたと歩行したまふ。
おん脚白く濡らし

怒りはげしきにあたへざれば
足なやみひとり海邊をわたらせたまふ。
見よ 烈日の丘に燃ゆる瞳孔あり
おん手に魚あれども泳がせたまはず
聖者めんめんと涙をたれ
はてしなき砂金の道を踏み行きたまふ。

緑蔭倶楽部

都のみどりは瞳ひとみにいたく
緑蔭倶楽部の行樂は
ちまたに銀をはしらしむ。
五月はじめの朝まだき
街樹の下に並びたる
わがともがらの一列は

はまきたばこの麻酔より
襟脚きよき娘らをいただきしむ。
緑蔭倶楽部の行樂の
その背廣はいちやうにうす青く
みよや都のひとびとは
手に手に白き皿を捧げもち
しづしづとはや遠近とちんを行きかへり
緑蔭倶楽部の會長の
遠き畫廊を渡り行くとき。

榛名富士

その絶頂^{いたadaki}を光らしめ
とがれる松を光らしめ
峰に粉雪けぶる日も
松に花鳥をつけしめよ

ふるさとの山^{やま}遠々^{とほやほ}に
くろずむごとく凍る日に
天景をさへぬきんでて
利根川の上に光らしめ
祈るがごとく光らしめ。

空に光る

100

わが哀傷のはげしき日
するどく齧齒はじばを抜きたるに
この齧齒は昇天し
たちまち高原の上にかびいで
ひねもす怒りに輝けり。
みよくもり日の空にあり
わが瞳めにいたき
とき金色こんじきのちさき蟲
中空に光りくるめけり。

Omegaの瞳

101

死んでみたまへ、死蠟の光る指先から、お前の靈がよろよろとして
昇發する。その時お前は、ほんたうにおめがの青白い瞳めを見るこ
とができる。それがお前のほんたうの人格であつた。
ひとが猫のやうに見える。

吠える犬

月夜の晩に 犬が墓地をうろついてゐる。

この遠い 地球の中心に向つて吠えるところの犬だ。

犬は透視すべからざる地下に於て 深くかくされたるところの金庫
を感知することにより。

金庫には翡翠および夜光石をもつて充たされたることを感應せるこ
とにより。

吠えるところの犬は その心霊に於てあきらかに白熱され その心
臓からは螢光線の放射のごときものを透影する。

この青白い犬は 前足をもつて堅い地面を掘らんとして焦心する。

遠い遠い地下の世界において 微動するものを感應することにより。

吠えるところの犬は哀傷し 狂號し その明らかに直視するものを
掘らんとして かなしい月夜の墓地に焦心する。

吠えるところの犬は人である。

なんぢ、忠實なる、敏感なる、しかれどもまつたく孤獨なる犬よ。

汝が吠えることにより 病兒をもつた隣人のために銃をもつて撃たれるまで。

吠えるところの犬は 青白き月夜においての人である。

極光

懺悔者の背後には美麗な極光がある。

柳

放火 殺人 竊盜 夜行 姦淫 およびあらゆる兇行をして柳の樹
 下に行はしめよ。夜において光る柳の樹下に。
 そもそも柳が電氣の良導體なることを 最初に發見せるもの先祖の
 中にあり。

手に兇器をもつて人畜の内臓を電裂せんとする兇賊がある。
 かざされたところの兇器は、その生なまあたたかき心臓の上におかれ
 生ぐさき夜の呼吸において點火發光するところのびすとるである。
 しかしてみよ、この黒衣の曲者くせものも 白夜柳の木の下に凝立する所以ゆえ
 である。

月に吠える
(後期)

蛙の死

蛙が殺された

子供がまるくなつて手をあげた。

みんないつしよに

かわゆらしい

血だらけの手をあげた。

月が出た

丘の上に人が立つてゐる。

帽子の下に顔がある。

かなしい遠景

かなしい薄暮になれば
労働者にて東京市中が満員なり。
それらの憔悴した帽子のかげが
市街中いちめんひろがり
あつちの市區でもこつちの市區でも
堅い地面を掘つくりかへす。

掘り出して見るならば
煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ。
重さ五匁ほどもある
にほひの莖のひからびきつた根つ株だ。
それも本所深川あたりの遠方からはじめ
おひおひ市中いつたいにおよぼしてくる。
なやましい薄暮のかげで
しなびきつた心臓がしやべるを光らしてゐる。

悲しい月夜

ぬすつと犬めが
くさつた波止場の月に吠えてゐる。
たましひが耳をすますと
陰氣くさい聲をして
黄^きろい娘たちが合唱してゐる

合唱してゐる

波止場のくらしい石垣で。

いつも

なぜおれはこれなんだ

犬よ

青白いふしあはせの犬よ。

死

みつめる土地の底から
奇妙きてれつの手がでる
足がでる
くびがでしやばる。
諸君

こいつはいつたい
なんといふ驚鳥だい。
みつめる土地の底から
馬鹿づらをして
手がでる
足がでる
くびがでしやばる。

危険な散歩

春になつて

おれは新らしい靴のうらにごむをつけた。

どんな粗製の歩道もあるいても

あのいやらしい音がしないやうに。

それにおれはどつさり毀れものをかかへこんでる

それがなによりけんのんだ。

さあ、そろそろ歩きはじめた

みんなそつとしてくれ。

そつとしてくれ。

おれは心配で心配でたまらない

たとひどんなことがあつても

おれの歪んだ足つきだけは見ないでおくれ。

おれはぜつたいぜつめいだ

おれは病氣の風船のりみたいに

いつも憔悴した方角で

ふらふらふらあるいてゐるのだ。

酒精中毒者の死

あふむきに死んでゐる酒精中毒者の
まつしろい腹のへんから
えたいのわからぬものが流れてゐる
透明な青い血漿と
ゆがんだ多角形の心臓と
腐つたはらわたと
らうまちすの爛れた手くびと

ぐにやぐにやした臓物と
そこらいちめん
地べたはびかぴか光つてゐる
草はすどくとがつてゐる。
すべてがらぢうむのやうに光つてゐる。

こんなさびしい風景の中にうきあがつて
白つほけた殺人者の顔が
草のやうにびらびら笑つてゐる。

干からびた犯罪

一一三

どこから犯人は逃走したか

ああいく年もいく年もまへから

ここに倒れた椅子がある

ここに兇器がある

ここに屍體がある

ここに血がある

さうして青ざめた五月の高窓にも

おもひにしづんだ探偵のくらい顔と

さびしい女の髪の毛とがふるゑて居る。

椅子

椅子の下にねむれるひとは

おほいなる家をつくれるひとの子供らか。

一一三

内部に居る人が畸形な病人に見える理由

わたしは窓かけのれいすのかげに立つて居ります
 それがわたくしの顔をうすぼんやりと見せる理由です。
 わたしは手に遠めがねをもつて居ります
 それでわたくしはずつと遠いところを見て居ります
 につける製の犬だの 羊だの
 あたまのはげた子供たちの歩いてゐる林をみて居ります

それらがわたくしの瞳をいくらかかすんでみせる理由です。
 わたしはけさ きやべつの皿を喰べすぎました
 そのうへこの窓硝子は非常に粗製です
 それがわたくしの顔を こんなに甚だしく歪んで見せる理由です。
 じつさいのところを言へば
 わたくしは健康すぎるぐらゐなものです
 それだのになんだつて 君はそこで私をみつめてゐる。
 なんだつてそんなに薄氣味わるく笑つてゐる。
 おおもちろん わたくしの腰から下ならば

そのへんがはつきりしないといふならば
いくらか馬鹿げた疑問であるが
もちろん つまり この青白い窓の壁にそうて
家の内部に立つてゐるわけです。

猫

まつくろけの猫が二匹
なやましいよるの家根のうへで
ぴんとたてた尻尾のさきから
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

『おわあ こんばんは』

『おわあ こんばんは』

『おぎやあ おぎやあ おぎやあ』

『おわああ ここの家の主人は病氣です』

春夜

一二八

淺蜩のやうなもの
蛤のやうなもの
みぢんこのやうなもの
それら生物の身體は砂にうもれ
どこからともなく
絹いとこのやうな手が無數に生え
手のほそい毛が浪のまにまにうごいてゐる。
あはれこの生なまあたたかい春の夜に

そよそよと潮みづながれ
生物の上のみづながれ
貝類の舌もちらちらとしてもえ哀しげなるに
とほく渚の方を見わたせば
ぬれた渚路には
腰から下のない病人の列があるいてゐる。
ふらりふらりと歩いてゐる。
ああそれら人間の髪の毛にも
春の夜のかすみいちめんいにふかくかけ
よせくるよせくる
このしろき浪の列はさざなみです。

一二九

ばくてりやの世界

110

ばくてりやの足

ばくてりやの口

ばくてりやの耳

ばくてりやの鼻

ばくてりやがおよいでゐる。

あるものは人物の胎内に

あるものは貝るゐの内臓に

あるものは玉葱の球心に

あるものは風景の中心に。

ばくてりやがおよいでゐる。

ばくてりやの手は左右十文字に生え

手のつまさきのやうにわかれ

そこからするどい爪が生え

毛細血管の類はべたいちめん^いにひろがつてゐる。

111

ばくてりやがおよいである。
ばくてりやが生活するところには
病人の皮膚をすかすやうに
べにいろの光線がうすくさしこんで
その部分だけほんのりとしてみえ
じつに、じつに、かなしみたへがたく見える。
ばくてりやがおよいである。

貝

つめたきもの生れ
その齒はみづにながれ
その手はみづにながれ
潮さし行方もしらにながるるものを
淺瀬をふみてわが呼ばへば
貝は遠音とほねにこたふ。

ありあけ

ながい疾患のいたみから
その顔はくもの巢だらけとなり
腰からしたは影のやうに消えてしまひ
腰からうへには藪が生え
手が腐れ

身體^{からだ}いぢめんがじつにめちやくちやなり。
ああけふも月が出て
有明の月が空に出て
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで
畸形の白犬が吠えてゐる。
しのめちかく
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

麥畑の一隅にて

まつ正直の心をもつて
わたくしどもは話がしたい
信仰からきたるものは
すべて幽霊のかたちで視える

かつてわたくしが視たところのものを
はつきりと汝にもきかせたい
およそこの類のものは
さかんに装束せる
光れる
おほいなるかくしどころをもつた神の半身であつた。

陽 春

ああ春は遠くからけぶつて来る
ほつくりふくらんだ柳の芽のしたに
やさしいくちびるをさしよせ
をとめのくちびるを吸ひこみたさに
春は遠くからごむ輪のくるまに乗つて来る。

ぼんやりした景色のなかで
白いくるまやさんの足はいそげども
ゆくゆく車輪がさかさにまわり
しだいに地面をはなれ出し
おまけにお客さまの腰がへんにふらふらとして
これではとてもあぶなさうなと
とんでもない時に春がまつしろの欠伸をする。

くさつた蛤

半身は砂のなかにうもれてゐて
それでゐてべろべろと舌を出してゐる。

この軟體動物のあたまの上には

砂利や潮みづがざらざらざらざら流れてゐる
ながれてゐる

ああ夢のやうにしづかにもながれてゐる。

ながれてゐる砂と砂との隙間から

蛤はまた舌べろをちらちらと赤くもえいづる。

この蛤は非常に憔悴れてゐるのである。

みればぐにやぐにやした内臓がくさりかかつてゐるらしい

それゆるる哀しげな晩がたになると

青ざめた海岸に坐つてゐて

ちらちらちらとくさつた息をするのですよ。

春の實體

かずかぎりもしれぬ蟲けらの卵にて
春がみつちりとふくれてしまつた。
げにげに眺めみわたせば
どこもかしこもこの類の卵にてぎつちりだ。
櫻のはなをみてあれば
櫻のはなにもこの卵いちめんに透いてみえ
やなぎの枝にも もちろんなり

たとへば蛾蝶のごときものさへ
そのうすき翅は卵にてかたちづくられ
それがあのやうにぴかぴかぴか光るのだ。
ああ瞳にもみえざる
このかすかな卵のかたちは楕圓形にして
それがいたるところに押しあひへしあひ
空氣中いつはいにひろがり
ふくらみきつたごむまりのやうに固くなつてゐるのだ。
よくよく指のさきでつついてみたまへ
春といふものの實體がおよそこのへんにある。

愛 憐

一四五

きつと可愛いかたい齒で

草のみどりをかみしめる女よ。

女よ

このうす青い草のいんきで

まんべんなくお前の顔をいろどつて

おまへの情慾をたかぶらしめ

しげる草むらでこつそりあそぼう。

みたまへ

ここにはつりがね草がくびをふり

あそこではりんだうの手がしなすと動いてゐる

ああ わたしはしつかりとお前の乳房を抱きしめる。

お前はお前で力いつはいに私の中からだを押しつける。

さうしてこの人氣のない野原の中で

わたしたちは蛇のやうなあそびをしよう。

ああ私は私で きりきりとお前を可愛がつてやり

お前の美しい皮膚の上に

青い草の葉の汁をぬりつけてやる。

一四五

戀を戀する人

わたしはくちびるに紅をぬつて
あたらしい白樺の幹に接吻した。
よしんば私が美男であらうとも
わたしの胸にはごむまりのやうな乳房がない。
わたしの皮膚からはきめのこまかい粉おしろいのにほひがしない。
わたしはしなびきつた薄命男だ
けふのかぐはしい初夏の野原で

きらきらする木立の中で
手には空いろの手ぶくろをはめてみた。
襟には襟おしろいのやうなものをぬりつけた。
かうしてひつそりとしなをつくつて
わたしは娘たちのするやうに
こころもちくびをかしげて
あたらしい白樺の幹に接吻した。
くちびるにはばらいろの紅をぬつて
まつしろの高い樹木にすがりついた。

およぐひと

およぐひとのからだはななめにのびる
二本の手はながくそろへてひきのばされる
およぐひとの心臓はくらげのやうにすきとほる。
およぐひとの瞳はつりがねのひびきをききつつ
およぐひとのたましひは水のうへの月をみる。

海水旅館

赤松の林をこえて
くらきおほなみはとほく光つてゐた。
このさびしき越後の海岸
しばしはなにを祈るころぞ
ひとり夕餉ををはりて
海水旅館の居間に灯を点す。

くぢら浪海岸にて

五月の貴公子

若草の上をあるいてゐるとき
わたしの靴は白い足あとをのこしてゆく
ほそいすてつきの銀が草でみがかれ
まるめてぬいだ手ぶくろが宙でをどつて居る。

ああすつぱりといつさいの憂愁をなげだして
わたしは柔和の羊になりたい。
しつとりとした貴女あなたのくびに手をかけて
あたらしいあやめおしろひのにほひをかいでみたい。
若くさの上をあるいてゐるとき
わたしは五月の貴公子である。

白い月

はげしいむし齒のいたみから
ふくれあがつた頬つぺたをかかへながら
わたしは棗の木の下を掘つてゐた
なにかの草の種を蒔かうとして
きやしやの指先を泥だらけにしなが
らつめたい地べたを掘つくりかへした。

ああ わたしはそれをおぼえてゐる
うすらさむい日のくれがたに
まあたらしい穴の下で
ちろ ちろ とみみずがうごいてゐた。
そのとき低い建物のうしろから
まつしろい女の耳を
つるつるとなでるやうに月があがつた。
月があがつた。

肖像

あいつはいつも歪んだ顔をして
窓のそばに突つ立つてゐる。
白いさくらが咲くころになると
あいつはまた地面の底から
むぐらもちのやうに這ひ出してくる。
ぢつと足音をぬすみながら

あいつが窓にしのびこんだところで
おれは早取寫真にうつした。

ぼんやりした光線のかげで
白つほけた乾板をすかして見ると
なにかの影のやうに薄く寫つてゐた。
おれのくびから上だけが
おいらん草のやうにふるゑてゐた。

さびしい人格

一五六

さびしい人格が私の友を呼ぶ
わが見知らぬ友よ 早くきたれ
ここの古い椅子に腰をかけて、二人でしづかに話してゐよう。
なにも悲しむことなく きみと私でしづかな幸福な日をくらさう
遠い公園のしづかな噴水の音をきいてゐよう
しづかに、しづかに、二人でかうして抱き合つてゐよう
母にも父にも兄弟にも遠くはなれて
母にも父にも知らない孤兒の心をむすび合はさう

ありとあらゆる人間の生活ちかやの中で
おまへと私だけの生活について話し合はう。
まづしいたよりない 二人だけの祕密の生活について
ああ その言葉は秋の落葉のやうに そうそうとして膝の上にも
散つてくるではないか。

わたしの胸は かよわい病氣したをさな兒の胸のやうだ
わたしの心は恐れにふるふる せつない せつない 熱情のうる
みに燃えるやうだ。

ああいつかも 私は高い山の上へ登つて行つた

一五七

けはしい坂路をあふぎながら 蟲けらのやうにあこがれて登つて
行つた

山の絶頂に立つたとき 蟲けらはさびしい涙をながした。

あふげば、ばうばうたる草むらの山頂で おほきな白つほい雲が
ながれてゐた。

自然はどこでも私を苦しくする

そして人情は私を陰鬱にする

むしろ私はにぎやかな都會の公園を歩きつかれて

とある寂しい木蔭に椅子をみつけるのが好きだ。

ぼんやりした心で空を見てゐるのが好きだ。

ああ 都會の空をとほく悲しくながれてゆく煤煙

またその建築の屋根をこえて はるかに小さくつばめの飛んで

行く姿を見るのが好きだ。

よにもさびしい私の人格が

おほきな聲で見知らぬ友をよんで居る。

わたしの卑屈な不思議な人格が

鴉のやうなみすぼらしい様子をして

人氣のない冬枯れの椅子の片隅にふるゑて居る。

見しらぬ犬

一六〇

この見もしらぬ犬が私のおとをついてくる
みすばらしい 後足でびつこをひいてゐる不具かたばの犬のかけだ。
ああ わたしはどこへ行くのか知らない
わたしのゆく道路の方角では
長屋の屋根がべらべらと風にふかれてゐる。
道ばたの陰氣な空地では
ひからびた草の葉つはがしなしなとほそくうごいて居る。

ああ わたしはどこへ行くのか知らない
おほきな いきものやうな月が ぼんやりと行手に浮んでゐる。
さうして背後うしろのさびしい往來では
犬のほそながい尻尾の先が地べたの上をひきずつて居る。
ああ どこまでも どこまでも
この見もしらぬ犬が私のおとをついてくる
きたならしい地べたをはひまはつて
わたしの背後うしろで後足をひきづつてゐる病氣の犬だ
とほく ながく かなしげにおびえながら
さびしい空の月に向つて遠白く吠えるふしあはせの犬のかけだ。

一六一

青樹の梢をあふぎて

一六二

まづしい さみしい町通りで
青樹がほそほと生えてゐた。
わたしは愛をもとめてゐる
わたしを愛する心のまづしい乙女を求めてゐる
そのひとの手は青い梢の上でふるゑてゐる
わたしの愛を求めるために
いつも高いところで やさしい感情にふるへてゐる。

わたしは遠い遠い街道で乞食をした
みじめにも飢ゑた心が 腐つた葱や肉のにおひを嗅いで涙をな
がした

うらぶれはてた乞食の心で いつも町の裏通りを歩きまはつた。
愛をもとめる心は かなしい孤獨の長い長いつかれの後にきたる
それはなつかしい おほきな海のやうな感情である。
道ばたのやせ地に生えた青樹の梢で
ちつほけな葉つはがひらひらと風にひるがへつてゐた。

一六三

蛙よ

蛙かへるよ

青いすすきやよしの生えてる中で、
蛙かへるは白くふくらんでゐるやうだ。

雨のいつはいにふる夕景に

ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙かへる

まつくらの地面をたたきつける

今夜は雨や風のはげしい晩だ。

つめたい草の葉つはの上でも

ほつと息をすひこむ蛙かへる

ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙かへる

蛙かへるよ

わたしの心はお前から遠くはなれてゐない

わたしは手に燈灯あかりをもつて

くらい庭の面おもてを眺めてゐた

雨にしほるる草木の葉を　つかれた心もちで眺めてゐた。

山に登る

旅よりある女に贈る

山の頂上にきれいな草むらがある
その上でわたしたちは寝ころんでゐた。
眼をあげるとほい麓の方を眺めると
いちめんひるびるとした海の景色のやうにおもはれた。

空には風がながれてゐる
おれは小石をひろつて口にあてながら
どこといふあてもなしに
ばうばうとした山の頂上をあるいてゐた。

おれはいまでも お前のことを思つてゐるのだ。

孤獨

田舎の白つほい道ばたで
つかれた馬のところが
ひからびた日向の草をみつめてゐる。
ななめに　しのしのとほそくもえる
ふるふるさびしい草をみつめる。

田舎のさびしい日向に立つて
おまへはなにを視てゐるのか
ふるふる　わたしの孤獨のたましひよ。
このほこりつほい風景の顔に
うすく涙がながれてゐる。

田舎を恐る

一七〇

わたしは田舎をおそれる

田舎の人氣のない水田の中にふるゑて

ほそながくのびる苗をおそれる。

くらい家屋の中に住まづしい人間のむれをおそれる。

田舎のあぜみちに坐つてゐると

おほなみのやうな土壤の重みが わたしの心をくらくする

土壤のくさつたにほひが私の皮膚をくろくませる

冬枯れのさびしい自然が私の生活をくるしくする。

田舎の空氣は陰鬱で重くるしい

田舎の手觸りはざらざらして氣もちがわるい

わたしはときどき田舎を思ふと

きめのあらい動物のにほひに惱まされる。

わたしは田舎をおそれる

田舎は熱病の青じろい夢である。

一七一

贈物にそへて

一七二

兵隊どもの列の中には
性分のわるいものがゐたので
たぶん標的の圖星をはづした。
銃殺された男が
夢のなかで息をふきかへしたときに
空にはさみしいなみだがながれてゐた。
『これはさういふ種類の煙草です。』

白い共同椅子

森の中の小徑にそうて
まつ白い共同椅子がならんでゐる。
そこらはさむしい山の中で
たいそう緑のかげがふかい
あちらの森をすかしてみると
そこにもさみしい木立がみえて
上品な まつしろな椅子の足がそろつてゐる。

一七三

雲雀の巢

一七四

おれはよにも悲しい心を抱いて故郷ふるさとの河原を歩いた
河原には よめな つくしのたぐひ
せり なづな すみれの根もぼうぼうと生えてゐた。
その低い砂山の蔭には利根川がながれてゐる ぬすびとのやうに
暗くやるせなく流れてゐる。
おれはぢつと河原にうづくまつてゐた
おれの眼のまへには河原よもぎの草むらがある
ひとつかみほどの草むらである

蓬はやつれた女の髪の毛のやうに
へらへらと風にうごいてゐた。

おれはあるいやなことをかんがへこんでゐる。それは恐ろしく不
吉なかんがへだ。

そのうへ きちがひじみた太陽がむしあつく帽子の上から照りつ
けるので おれはぐつたり汗ばんでゐる。

あへぎ苦しむひとが水をもとめるやうに

おれはぐいと手をのぼした

おれのたましひをつかむやうにして

なにかつかんだ

干からびた髪の毛のやうなものをつかんだ。

一七五

河原よもぎの中にかくされた雲雀の巢

びよ びよ びよ びよ びよ びよ びよ びよ と空では雲雀
の親が鳴いてゐる。

おれはかわいそうな雲雀の巢をながめた

巢はおれの大きな掌の上で やさしくも毬のやうにふくらんだ

いとけなく育まくまれるものの愛に媚こびる感覚が

あきららかにおれの心にかんじられた。

おれはへんてこに寂しくそして苦しくなつた

おれはまた親鳥のやうに頸くびをのばして巢の中をのぞいた。

巢の中は夕暮どきの光線のやうに うすぼんやりとしてくらかつた。

かぼそい植物の纖毛に觸れるやうな たとへやうもなく *Delicate*

の哀傷が 影のやうに神経の末梢をかすめて行つた。

巢の中のかすかな光にてらされて ねずみいろの雲雀の卵が四つほ

どさびしげに光つてゐた。

わたしは指をのばして卵のひとつをつまみあげた

生あつたかい生物の呼吸が親指の腹をくすぐつた

死にかかつた犬をみるときのやうな齒がゆい感覚が おれの心の底

にわきあがつた。

かういふときの人間の感覚の生ぬるい不快さから殘虐な罪が生れる

罪をおそれる心は罪を生む心のさきがけである。

おれは指と指とにはさんだ卵をそつと日光にすかしてみた

うす赤いぼんやりしたものが血のかたまりのやうに透いてみえた

つめたい汁のやうなものが感じられた
そのとき指と指とのあひだに生ぐさい液體がじくじくと流れてゐる
のをかんだ。

卵がやぶれた

野蠻な人間の指が むざんにも繊細なものを押しつぶしたのだ
鼠いろの薄い卵の殻にはKといふ字が 赤くほんのりと書かれてゐた。

いたいけな小鳥の芽生 小鳥の親

その可愛らしいくちばしから造つた巢

一所けんめいでやつた小動物の仕事 愛すべき本能のあらはれ。
いろいろな善良な しほらし考が私の心にはげしくこみあげた。

おれは卵をやぶつた

愛と悦びとを殺して 悲しみと呪ひとにみちた仕事をした

くらい不愉快なおこなひをした

おれは陰鬱な顔をして地面をながめつめた

地面には石や硝子かけや 草の根などがいちめんにかがやいてゐた。

びよ びよ びよ びよ びよ びよ びよと空では雲雀

の親が鳴いてゐる。

なまぐさい春のほひがする

おれはまたあのいやのことをかながへこんだ

人間が人間の皮膚のほひを嫌ふといふこと

人間が人間の生殖器を醜惡にかんずること あるとき人間が馬の

やうに見えること

人間が人間の愛にうらざりすること

人間が人をきらふこと

ああ 厭人病者。

ある有名なロシヤの小説 非常に重たい小説をよむと厭人病者の

話が出てゐた

それは立派な小説だ けれども恐ろしい小説だ

心が愛するものを肉體で愛することの出来ないといふのは なん

たる邪悪の思想であらう。なんたる醜悪の病氣であらう。

おれは生れていつペンでも娘たちに接吻したことはない

ただ愛する小鳥たちの肩に手をかけて せめては兄らしい言葉を

言つたことすらもない。

ああ 愛する 愛する 愛する小鳥たち。

おれは人間を愛する。けれどもおれは人間を恐れる。

おれはときどき すべての人々から脱れて孤獨になる。そしておれ

の心は すべての人々を愛することによつて涙ぐましくなる。

おれはいつでも 人氣のない寂しい海岸を歩きながら 遠い都の雑

鬧を思ふのがすきだ。

遠い都の灯ともし頃に ひとりで故郷の公園地をあるくのがすきだ。

ああ きのみきのふとて おれは悲しい夢をみつづけた。

おれはくさつた人間の血のほひをかいた。

おれはくるしくなる。

おれはさびしくなる。

心で愛するものを、なにゆゑに肉體で愛することができないのか。

おれは懺悔する。

懺悔する。

おれはいつでも、くるしくなると懺悔する。

利根川の河原の砂の上に坐つて懺悔をする。

ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよと　空では

雲雀の親たちが鳴いてゐる。

河原蓬の根がばうばうとひろがつてゐる。

利根川はぬすびとのやうにこつそりと流れてゐる。

あちらにも　こちらにも　うれはしげな農人の顔がみえる。

それらの顔はくらくして地面をばかりみる。

地面には春が疱瘡のやうにむつくりと吹き出して居る。

おれはいぢらしくも雲雀の卵を拾ひあげた。

笛

子供は笛が欲しかった。

その時子供のお父さんは書きものをして居るらしく思はれた。

子供はお父さんの部屋をのぞきに行つた。

子供はひつそりと扉とびらのかげに立つてゐた。

扉のかげにはさくらの花のにほひがする。

そのとき室内で大人おとなはかんがへこんでゐた。

大人おとなの思想がくるくると渦まきをした。

ある混み入つた思想のぢれぢれんまが大人の心を瘵かきつひ撃させた。

みれば ですくの上うへに突つ伏した大人の額を いつのまにか蛇がざり

ざりとまきつけてゐた。

それは春らしい今朝の出来事が そのひとの心を憂はしくしたの
である。

本能と良心と

わかちがたき一つの心をふたつにわかたんとする大人おとなの心のうら

さびしさよ。

力をこめて引きはなされた二つの影は

糸のやうにもつれあひつつ ほのぐらき明窓あかりまどのあたりをさまようた。

人は自分の頭のうへに それらの悲しい幽靈の通りゆく姿をみた。

大人おとなは恐ろしさに息をひそめながら祈をはじめた「神よ ふたつ

の心をひとつにすることなからしめたまへ

けれどもながいあひだ 幽靈おんりょうは扉とびらのかげを出這入りした。

扉のかげにはさくらの花のほひがした。

そこには青白い顔をした病身のかれの子供が立つてゐた。

子供は笛が欲しかつたのである。

子は扉をひらいて部屋の一角に立つてゐた。

子供は窓際のですくに突つ伏してゐる おほいなる父の頭脳をみた。

その頭脳のあたりは甚だしい陰影になつてゐた。

子供の視線が蠅のやうにその場所にとまつてゐた。

子供のわびしい心がなにもかひきつけられてゐたのだ。

しだいに子供は力をかんじはじめた

子供は實に はつきりとした聲で叫んだ。

みればそこには笛がおいてあつたのだ。

子供が欲しいと思つてゐた紫いろの小さい笛があつたのだ。

子供は笛に就いてなにごとも父に話してはなかつた。

それ故この事實はまつたく偶然の出来事であつた。

おそらくはなにかの不思議なめぐりあはせであつたのだ。
けれども子供はかたく父の奇蹟を信じた。
もつとも偉大なる大人の思想が生み落した陰影の笛について。
卓の上に置かれた笛について。

青猫 (前期)

内部への月影

憂鬱のかげのしげる

この暗い家屋の内部に

ひそかにしのび入り

ひそかに壁をさぐり行き

手もて風琴の鍵盤に觸れるはたれですか。

そこに宗教のきこえて

しづかな感情は室内にあふれるやうだ。

洋燈を消せよ

洋燈を消せよ

暗く憂鬱な部屋の内部を

しづかな瞑想のながれにみたさう。

書物を取りて棚におけ

あふれる情調の出水にうかばう。

洋燈を消せよ

洋燈を消せよ。

いま憂鬱の重たくたれた

黒いびらうごの帷幕のかげを

さみしく音なく彷徨する

ひとつの幽しい幻像はなにですか。

きぬずれの音もやさしく

こよひのここにしのべる影はたれですか。

ああ内部へのさし入る月影

階段の上にもながれながれ。

蝶を夢む

座敷のなかで 大きなあつぼつたい翼をひろげる
蝶のちひさな 醜い顔とその長い觸手と
紙のやうにひろがる あつぼつたいつばさの重みと
わたしは白い寢床のなかで目をさましてゐる。
しづかにわたしは夢の記憶をたどらうとする
夢はあはれにさびしい秋の夕べの物語
水のほとりにしづみゆく落日と
しぜんに腐りゆく古き空家にかんするかなしい物語。

夢をみながら わたしは幼な兒のやうに泣いてゐた
たよりのない幼な兒の魂が
空家の庭に生える草むらの中で しめつほいひきがへるのやうに泣
いてゐた。

もつともせつない幼な兒の感情が
とほい水邊のうすらあかりを戀するやうに思はれた
ながいながい時間のあひだ わたしは夢をみて泣いてゐたやうだ。

あたらしい座敷のなかで 蝶が翼をひろげてゐる
白い あつぼつたい 紙のやうな翼をふるはしてゐる

腕のある寢臺

綺麗なびらうどで飾られたひとつの寢臺

ふつくりとしてあつたかい寢臺

ああ あこがれ こがれ いくたびか夢にまで見た寢臺

私の求めてゐただひとつの寢臺

この寢臺の上に寝るときはむつくりとしてあつたかい

この寢臺はふたつのびらうどの腕をもつて私を抱く

そこにはたのしい愛の言葉がある

あらゆる生活ちいよのよろこびをもつたその大きな胸の上に

私はすつほりと疲れたからだを投げかける。

ああこの寢臺の上にはじめて寝るとき悦びはどんなであらう

そのよろこびはだれも知らない祕密のよろこび

さかんに強い力をもつてひろがりゆく生命いのちのよろこびだ。

みよ ひとつの魂はその上にすすりなき

ひとつの魂はその上に合掌するまでにいたる

ああかくのごとき大なる愛憐の寢臺はどこにあるか

それによつて惱めるものは慰められ 求めるものはあたへられ

みなその心は子供のやうにすやすやと眠る

ああ このひとつの寢臺 あこがれもとめ夢にみるひとつの寢臺

ああこの幻まぼろしの寢臺はどこにあるか。

青空に飛び行く

一九八

かれは感情に飢えてゐる
かれは風に帆をあげて行く船のやうなものだ。
かれを追ひかけるな
かれにちかづいて媚をおくるな
かれを走らしめろ 遠く白い浪のしぶきの上に至るまで。
ああ かれのかへつてゆくところに健康がある
まつ白な 大きな幸福の寢床がある。

私をはなれて住むときには
かれにはなんの煩らひがあらう！
私は私でここに止つてゐよう
まづしい女の子のやうに 海岸に出で貝でも拾つてゐよう
ねぢくれた松の木の幹でも眺めてゐよう
さうして灰色の砂丘に坐つてゐると
私は私のちひさな幸福に涙がながれる。
ああ かれをして遠く遠く沖の白浪の上にかへらしめろ
かれにはかれの幸福がある。
ああかくして 一羽の鳥は青空に飛び行くなり。

一九九

冬の海の光を感ず

遠くに冬の海の光をかんずる日だ
 さびしい大浪おほなみの音おとをきいて心はなみだぐむ。
 けふ沖の鳴戸を過ぎてゆく舟の乗手はたれなるか
 その乗手等の黒き腕かみに浪の乗りてかたむく
 ひとり凍れる浪のしぶきを眺め
 海岸の砂地に生える松の木の梢を眺め

ここの日向に這ひ出づる蟲けらどもの感情さへ
 あはれを求めて砂山の影に這ひ登るやうな寂しい日だ。
 遠くに冬の海の光をかんずる日だ
 ああわたしの憂愁のたえざる日だ
 かうかうと鳴るあの大きな浪の音をきけ
 あの大きな浪のながれにむかつて
 孤獨のなつかしい純銀の鈴をふり鳴らせよ
 わたしの傷める肉と心。

灰色の道

二〇二

日暮れになつて散歩する道
ひとり私のうなだれて行く
あまりにさびしく灰色なる空の下によこたふ道。
あはれこのごろの夢の中なるまづしき乙女
その乙女のすがたを戀する心にあゆむ
その乙女は薄黄色なる長き肩掛けを身にまとひて
肩などはほつそりとやつれて哀れに見える。
ああこのさびしく灰色なる空の下で

私たちの心はまづしく語り 草ばなの露にぬれておもたく寄りそふ。
戀びとよ

あの遠い空の雷鳴をあなたは聴くか
かしこの空にひるがへる波浪の響にも耳をかたむけたまふか。

戀びとよ

このうす暗い冬の日の道邊に立つて
私の手には菊のすえたる匂ひがする
わびしい病鬱のにほひがする。
ああげにたへがたくもみじめなる私の過去よ
ながいながい孤獨の影よ

二〇三

いまこの並木ある冬の日の街路をこえて
 わたしは遠い白日の墓場をながめる
 ゆうべの夢のほのかなる名残をかぎて
 さびしいありあけの山の端をみる。

戀びとよ 戀びとよ。

戀びとよ

物言はぬ夢のなかなるまづしい乙女よ
 いつもふたりでびつたりとかたく寄りそひながら
 おまへのふしぎな麝香のほひを感じながら
 さうして霧のふかい谷間の墓をたづねて行かうね。

蟾 蜍

雨景の中で

ほうとふくらむ蟾蜍

へんに 大なる夢の中で

お前の思想は白くけぶる。

雨景の中で

ほうと呼吸をすひこむ靈魂

妙に幽明な宇宙の中で

一つの時間は抹消され

一つの空間は擴大する。

その襟足は魚である

ふかい谷間からおよぎあがる魚類のやうで
いつもしつとり濡れて青ざめてゐるながい襟足。
すべすべと磨きあげた大理石の柱のやうで
まつすぐでまつ白で
それでゐて恥かしがりの襟足。
このなよなよとした襟くびのみだらな曲線

いつもおしろいで塗りあげたすてきな建築
そのおしろいのねばねばと肌になびりつく魚の感覚
またその魚類の半襟のなかでおよいでゐるありさまはどうです。
ああこのなまめかしい直線のもつふしぎな誘惑
そのぬらぬらとした魚類の音楽にはたへられない
あはれ身を藻草のたぐひとなし
はやくこの奇異なる建築の柱になびりつきたい
はやく はやく この解きがたい夢の *Nymph* に身をまかせて。

春の芽生

私は私の腐蝕した肉體にさよならをした
そしてあたらしくできあがつた胴體からは
あたらしい手足の芽生が生えた
それらはじつにちつほけな
あるかないかも知れないぐらゐの芽生の子供たちだ。
それがこんな麗らかな春の日になり
からだ中でびよびよと鳴いてゐる

かわいらしい手足の芽生たちが
さよなら、さよなら、さよなら、と言つてゐる。
おおいとしげな私の新芽よ
はちされる細胞よ
いま過去のいつさいのものに別れを告げ
ずるぶん愉快になり
太陽のきらきらする芝生の上で
なまあたらしい人間の皮膚の上で
てんでに春のほるかを踊るときだ。

黒い蝙蝠

わたしの憂鬱は羽ばたきながら
ひらひらと部屋中を飛んでゐるのです。
ああなんといいふ幻覺だらう
とりとめもない怠惰な日和が さびしい涙をながしてゐる。
もう追憶の船は港をさり

やさしい戀人の捲毛もさらさら乾いてしまつた
草場に昆蟲のひげはふるゑて
季節は亡靈のやうにほの白くすぎてゆくのです。
ああ私はなにも見ない。
せめては片戀の娘たちよ
おぼろにかすむ墓場の空から 夕風のやさしい歌をうたつておくれ。

石竹と青猫

みどりの石竹の花のかげに　ひとつの幻の屍體は眠る
 その黒髪は床にながれて
 手足は力なく投げだされ　寢臺の上にあほむいてゐる。
 この密室の幕のかげを
 ひそかに音もなくしのんでくる　ひとつの青ざめたふしぎの情慾
 そはむしかへす麝香になやみ

くるしく　はづかしく　なまめかしき思ひのかざりをしる。
 ああいま春の夜の灯かげにちかく
 うれしくも死蠟のからだを嗅ぎてもてあそぶ
 やさしいくちびるに油をぬりつけ　すべすべとした白い肢體をもて
 あそぶ。

そはひとつのさびしい青猫

君よ　魔におびえて　このかなしい戯れをとがめたまふな。

海鳥

ある夜ふけの遠い空に
洋燈のあかり白白ともれてくるやうにする。
かなしくなりて家家の乾場をめぐり
あるひは海にうろつき行き
くらしい夜浪のよびあげる響をきいてる。

しとしとふる雨にぬれて
さびしい心臓は口をひらいた
ああ かの海鳥はどこへ行つたか。
運命の暗い月夜を翔けさり
夜浪によごれた腐肉をついばみ泣きあたりしが
ああ遠く飛翔し去つてかへらず。

眺望

旅の記念として 室生犀星に

さうさうたる高原である
友よ この高きに立つて眺望しよう。
僕らの人生について思惟することは
ひさしく既に轉變の憂苦をまなんだ
ここには爽快な自然があり
風は全景にながれてゐる。

瞳をひらけば

瞳は追憶の情侈になづんで濡れるやうだ。
友よここに來れ
ここには高原の植物が生育し
日向に快適の思想はあたたまる。
ああ君よ
かうした情歡もひさしぶりだ。

陸橋

二一八

陸橋を渡つて行かう
黒くうづまく下水のやうに
もつれる軌道の高架をふんで
はるかな落日の部落へ出よう。
かしこを高く
天路を翔けさる鳥のやうに
ひとつの架橋を越えて跳躍しよう。

家畜

二一九

花やかな月が空にのぼつた
げに大地のあかるいことは。
小さな白い羊たちよ
家の屋根の下にお這入り
しづかに涙ぐましく 動物の足調子をふんで。

野景

弓なりにしなつた竿の先で
小魚がいつぴき ぴちぴちはねてゐる。
おやぢは得意で有頂天だが
あいにく世間がしづまりかへつて
遠い牧場では
牛がよそつほをむいてゐる。

絶望の逃走

おれらは絶望の逃走人だ
おれらは監獄やぶりだ
あの陰鬱な柵をやぶつて
いちどに街路へ突進したとき
そこらは叛逆の血みどろで
看守は木つ葉のやうにふるゑてゐた。

あれからずつと
おれらは逃走してやつて來たのだ

あの遠い極光地方で 寒ざらしの空の下を
みんなは栗風のやうに這ひ廻つた
いつもおれたちの行くところでは
暗愁の、曇天の、吠えつきたい天氣があつた。

逃走の道のほとり

おれらはさまざまの自然をみた
曠野や 海や 湖水や 山脈や 都會や 部落や 工場や 兵營や、
病院や 銅山や
おれらは逃走し
どこでも不景氣な自然をみた

どこでもいまいまいめに
出あつた。

おれらは逃走する

ごうせややくその監獄やぶりだ
規則はおれらを捕縛するだらう
おれらは正直な無賴漢で
神様だつて信じはしない 何だつて信ずるものか
良心だつてその通り
おれらは絶望の逃走人だ。

逃走する

逃走する

あの荒寥とした地方から

都會から

工場から

生活から

宿命からでも逃走する

さうだ！ 宿命からの逃走だ。

日はすでに暮れようとし

非常線は張られてしまった

おれらは非力の叛逆人で

壓世の 猥弱の 虚無の冒瀆を知つてゐるばかりだ。

ああ逃げ道はどこにもない

おれらは絶望の逃走人だ。

僕等の親分

二二六

剛毅な慧捷の視線でもつて

もとより不敵の彼れが合圖をした

「やい子分の奴ら！」

そこで子分は突つはしり 四方に氣をくばり

めいめいのやつつける仕事を自覺した。

白晝商館に爆入し

街路に通行の婦人をひつさらつた

かれらの事業は奇蹟のやうで

まるで禮儀にさへ適つてみえる。

しづかな 電光の、抹殺する、まるで夢のやうな兇行だから

市街に自動車は平氣ではしり

どんな平和だつてみだしはしない。

もとより不敵で豪膽な奴らは

ぬけ目のない計畫から

勇敢から、快活から、押へきれない欲情から

自由に空をきる鳥のやうだ。

見ろ 見ろ 一團の襲撃するところ

意志と理性に照らされ

二二七

やくざの祕密はひつpegがされ
どこでも偶像はたたきわられる。

剛毅な慧捷の瞳ひとみでもつて

僕等の親分が合圖をする。

僕等は卑怯でみすぼらしく 生き甲斐もない無頼漢むらいまであるが

僕等の親分を信ずるとき

僕等の生活は充血する

仲間のみさげはてた奴らまでが

いつほんぶつこみ 抜きつれ

まつすぐ喧嘩の、繩ばりの、かたき讐敵の修羅場へたたき込む。

僕等の親分は自由の人で
青空を行く鷹のやうだ。
もとより大膽不敵な奴で
計畫し、遂行し、豫言し、思考し、創見する。
かれは生活を創造する。
親分！

涅槃

二三〇

花ざかりなる菩提樹の下
密林の影のふかいところで
かのひとの思惟おもひにうかぶ
理性の、幻想の、情感の、いとも美しい神祕をおもふ。
涅槃は熱病の夜あけにしらむ
青白い月の光のやうだ
憂鬱なる憂鬱なる
あまりに憂鬱なる歴世思想の

否定の、絶望の、悩みの樹蔭にただよふ静かな月影
哀傷の雲間にうつる合歡の花だ。

涅槃は熱帯の夜明けにひらく
巨大の美しい蓮華の花か
ふしぎな幻想のまらりや熱か
わたしは宗教の祕密をおそれる
ああかの神祕なるひとつのいめえぢ——「美しき死」への誘惑。
涅槃は媚薬の夢にもよほす
ふしぎな淫慾の悶えのやうで

二三一

それらのなまめかしい救世の情緒は
春の夜に聴く笛のやうだ。

二三二

花ざかりなる菩提樹の下

密林の蔭のふかいところで

かのひとの思惟にかかぶ

理性の、幻想の、情感の、いとも美しい神祕をおもふ。

かつて信仰は地上にあつた

泥薄はいすらええるの野にござつて

悪しき大天狗小天狗を退治なされた。

「人は麥餅だけでは生きないのぢや」

初手の天狗が出たとき

泥薄如來の言はれた言葉ぢや。

これぢやで皆様

ひとはたましひが大事でござらう

二三三

たましひの罪を洗ひ淨めて

よくよく昇天の支度をなされよ。

この世の説教も今日かぎりぢや

明日はくるすでお目にかからう。

南無童貞麻利亞聖天 保亞羅大師

さんたまりや さんたまりや

信仰のあつい人々は

いるまんの眼にうかぶ涙をかんじた

悦びの また悲しみの ふしぎな情感のかげをかんじた。

ひとびとは天を仰いだ

天の高いところに かれらの眞神の像を眺めた。

さんたまりや さんたまりや。

奇異なるひとつのいめえぢは

私の思ひをわびしくする

かつて信仰は地上にあつた。

宇宙の 無限の 悠々とした空の下で

はるかに永生の奇蹟をのぞむ 熱したひとびとの群があつた。

ああいま群集はどこへ行つたか

かれらの幻想はどこへ散つたか。

わびしい追憶の心像は 蒼空にうかぶ雲のやうだ。

まづしき展望

まづしき田舎に行きしが
かわける馬秣まぐを積みたり
雑草の道に生えて
道に蠅のむらがり
くるしき埃あひのにほひを感ず。
ひねもす疲れて畔あひにゐしに

君はきやしやなる洋傘かさの先もて
死しにたる蛙かを畔あひに指せり。
げにけふの思ひは悩みに暗く
そはおもたく沼地に渴かきて苦痛なり
いづこに空虚のみつべきありや
風なき野道に遊戯あそびをすてよ
われらの生活は失踪せり。

農夫

海牛のやうな農夫よ

田舎の屋根には草が生え、夕餉の煙ほの白く空にただよふ。
耕作を忘れたか肥つた農夫よ

田舎に飢饉は迫り、冬の農家の壁は凍つてしまつた。

さうして洋燈のうす暗い厨子のかげで

先祖の死霊がさむしげにふるゑてゐる

このあはれな野獸のやうに

ふしぎな宿命の恐怖に憑かれたものども

その胃袋は野菜でみたされ、くもつた神経に暈がかかる。

冬の寒ざらしの貧しい田舎で

愚鈍な 海牛のやうな農夫よ。

波止場の煙

野鼠は畠にかくれ
 矢車草は散り散りになつてしまつた。
 歌も 酒も 戀も 月も もはやこの季節のものでない
 わたしは老いさらばつた鴉のやうに
 よぼよぼとして遠國の旅に出かけて行かう。

さうして乞食どものうろろする
 どこかの遠い港の波止場で
 海草の焚けてる空のけむりでも眺めてゐよう。
 ああ まぼろしの乙女もなく
 しをれた花束のやうな運命になつてしまつた
 砂地にまみれ
 砂利食がにのやうにひくい音で泣いてゐよう。

薄暮の部屋

二四二

つかれた心臓は夜をよく眠る

私はよく眠る

ふらんねるをきたさびしい心臓の所有者だ

なにもものか　そこをしづかに動いてゐる夢の中なるちのみ兒

寒さにかじかまる蠅のなきごゑ

ぶむ　ぶむ　ぶむ　ぶむ　ぶむ　ぶむ。

私はかなしむ　この白つほけた室内の光線を

私はさびしむ　この力のない生命の律動を。

戀びとよ

お前はそこに坐つてゐる　私の寢臺のまくらべに

戀びとよ　お前はそこに坐つてゐる

お前のほつそりした首すぢ

お前のながくのばした髪の毛

ねえ　やさしい戀びとよ

私のみじめな運命をさすつておくれ

私はかなしむ

私は眺める

二四三

そこに苦しげなるひとつの感情

病みてひろがる風景の憂鬱を

ああ さめざめたる部屋の隅から つかれて床をさまよふ蠅の幽霊
ぶむ ぶむ ぶむ ぶむ ぶむ

戀びとよ

私の部屋のまくらべに坐るをとめよ

お前はそこになにを見るのか

わたしについてなにを見るのか

この私のやつれたからだ 思想の過去に残した影を見てゐるのか

戀びとよ

すえた菊のにほひを嗅ぐやうに

私は嗅ぐ お前のあやしい情熱を その青ざめた信仰を

よし二人からだをひとつにし

このあたたかみあるものの上にしも お前の白い手をあてて

手をあてて。

戀びとよ

この閑寂な室内の光線はうす紅く

そこにもまた力のない蠅のうたごゑ

ぶむ ぶむ ぶむ ぶむ ぶむ ぶむ

戀びとよ

わたしのいぢらしい心臓は お前の手や胸にかじかまる子供の

やうだ

戀びとよ

戀びとよ。

寢臺を求む

どこに私たちの悲しい寢臺があるか

ふつくりとした寢臺の 白いふとんの中にうづくまる手足があるか

私たち男はいつも悲しい心である

私たちは寢臺をもたない

けれどもすべての娘たちは寢臺をもつ

すべての娘たちは 猿に似たちひさな手足をもつ

さうして白い大きな寢臺の中で小鳥のやうにうづくまる

すべての娘たちは 寝臺の中でたのしげなすりなきをする
ああ なんといふしあはせの奴らだ
この娘たちのやうに

私たちもあたたかい寝臺をもとめて

私たちもさめざめとすすりなきがしてみたい

みよ すべての美しい寝臺の中で 娘たちの胸は互にやさしく

抱きあふ

心と心と

手と手と

足と足と

からだとからだとを紐にてむすびつけよ

心と心と

手と手と

足と足と

からだとからだとを撫でることによりて慰めあへよ

このまつ白の寝臺の中では

なんといふ美しい娘たちの皮膚のよろこび

なんといふいぢらしい感情のためいきだ。

けれども私たち男の心はまづしく

いつも悲しみにみちて大きな人類の寝臺をもとめる

その寢臺はばね仕掛けでふつくりとしてあたたかい
まるで大雪の中にうづくまるやうに
人と人との心がひとつに解けあふ
かぎりなく美しい愛の寢臺
ああ どこに求める 私たちの悲しい寢臺があるか
どこに求める
私たちのひからびた醜い手足
このみじめな疲れた魂の寢臺はどこにあるか。

強い腕に抱かる

風にふかれる葦のやうに
私の心は弱々しく いつも恐れにふるえてゐる。
女よ
おまへの美しい精悍の右腕で
私の中からだをがしりと抱いてくれ
このふるえる病氣の心を しづかにしづかになだめてくれ。
ただ抱きしめてくれ私の中からだを
ひつたりと肩によりそひながら

私の弱々しい心臓の上に

おまへのかわゆらしい あたたかい手をおいてくれ

ああ 心臓のこここのところに手をあてて

女よ

さうしておまへは私に話しておくれ

涙にぬれたやさしい言葉で

「よい子よ

恐れるな なにもものをも恐れなさるな

あなたは健康で幸福だ

なにものがあなたの心をおびやかさうとも あなたは

おびえてはなりません

ただ遠方をみつめなさい

めばたきをしなさるな

めばたきをするならば あなたの弱々しい心は鳥のやうに

飛ん行つてしまふのだ

いつもしつかりと私のそばによりそつて

私のこの健康な心臓を

このうつくしい手を

この胸を この腕を

さうしてこの精悍の乳房をしつかりと。」

沖を眺望する

この海岸には草も生えない
なんといふさびしい海岸だ
かうしてしづかに浪を見てみると
浪の上に浪がかさなり

浪の上に白い夕方の月がかんでくるやうだ。
ただひとり出でて磯馴れ松の木をながめ
空にうかべる島と船とをながめ
私はながく手足をのぼして寝ころんでゐる
ながく呼べどもかへらざる幸福のかげをもとめ
沖に向つて眺望する。

商業

二五六

商業は旗のやうなものである
貿易の海をこえて遠く外國からくる船舶よ
あるひは綿や瑪瑙をのせ
南洋 亞細亞の島々をめぐりあるく異國のまどろすよ。
商業の旗は地球の國々にひるがへり
自由の領土のいたるところに吹かれてゐる。
商人よ

港に君の荷物は積まれ

さうして運命は出帆の汽笛を鳴らした。

船夫よ

水先案内よ

いまおそろしい嵐のまへに 　むくむくと盛りあがる雲を見ないか
妖魔のあれ狂ふすがたを見ないか

たちまち帆柱は裂きくだかれ

するどく笛のさけばれ

さうして船腹の浮きあがる青じろい死魚を見る。

ああ日はしづみゆき

二五七

かなしく沖合にさまよふ不吉の鷗はなにを歌ふぞ。
商人よ

ふたたび椰子の葉の茂る港にかへり

君のあたらしい綿と瑪瑙を積みかへせ

亞細亞のふしぎなる港々にさまよひ來り

青空高くひるがへる商業の旗の上に

ああかのさびしげなる幽靈船のうかぶをみる。

商人よ！ 君は冒険にして自由の人

君は白い雲のやうに この解きがたくふしぎなる愁ひをしる。

商業は旗のやうなものである。

群集の中を求めて歩く

私はいつも都會をもとめる

都會のにぎやかな群集の中に居ることをもとめる。

群集はおほきな感情をもつた浪のやうなものだ

どこへでも流れてゆくひとつのさかなな意志と愛欲とのぐるうふだ。

ああ ものがなしき春のたそがれどき

都會の入り混みたる建築と建築との日影をもとめ

おほきな群集の中にもまれてゆくのはどんなに楽しいことか。

みよこの群集のながれてゆくありさまを

ひとつの浪はひとつの浪の上にかさなり

浪はかざりなき日影をつくり 日影はゆるぎつつひろがり
すすむ。

人のひとりひとりにもつ憂ひと悲しみと みなそこの日影に消
えてあとかたもない。

ああ なんといふやすらかな心で 私はこの道をも歩いて行く
ことか

ああ このおほいなる愛と無心のたのしき日影
たのしき浪のあなたにつれられて行く心もちは涙ぐましくなる
やうだ。

うらがなしい春の日のたそがれどき

このひとつびとの群は建築と建築との軒をおよいで
どこへどうしてながれ行かうとするのか。

私のかなしい憂鬱をつつんでゐる ひとつのおほきな地上の日影
ただよふ無心の浪のながれ

ああ どこまでも どこまでも この群集の浪の中をもまれて行
きたい

浪の行方は地平にけむる

ひとつの ただひとつの「方角」ばかりさしてながれ行かうよ。

その手は菓子である

そのじつにかわゆらしい　むつくりとした工合はどうだ
 そのまるまるとして菓子のやうにふくらんだ工合はどうだ
 指なんかはまことにほつそりとしてしながよく
 まるでちひさな青い魚類のやうで
 やさしくそよそよとうごいてゐる様子はたまらない。
 ああ　その手の上に接吻がしたい

そつくりと口にあてて喰べてしまひたい
 なんといふすつきりとした指先のまるみだらう
 指と指との間に咲く　このふしぎなる花の風情はどうだ
 その匂ひは麝香のやうで　薄く汗ばんだ桃の花のやうにみえる。
 かくばかりも麗はしくみがきあげた女性の指
 すつほりとしたまつ白のほそながい指
 ひあいの鍵盤をたたく指
 針をもて絹をぬふ仕事の指
 愛をもとめる肩によりそひながら
 わけても感じやすい皮膚のうへに

かるく爪先をふれ

かるく爪でひつかき

かるくしつかりと押へつけるやうにする指のはたらき

そのぶるぶると身ぶるひをする愛のよろこび はげしく狡猾にくす

ぐる指

おすましで意地悪のひとさし指

卑怯で快活なこゆびのいたづら

親指の肌の太つたうつくしさと その暴虐なる野蠻性

ああ そのすべすべとみがきあげたいつほんの指をおしいただき

すつほりと口にくんでしやぶつてゐたい いつまでたつてもしや

ぶつてゐたい

その手の甲はわつぷるのふくらみで

その手の指は氷砂糖のつめたい食慾

ああ この食慾

子供のやうに意地のきたない無恥の食慾。

青猫

この美しい都會を愛するのはよいことだ
この美しい都會の建築を愛するのはよいことだ
すべてのやさしい女性をもとめるために
すべての高貴な生活をもとめるために
この都にきて賑やかな街路を通るはよいことだ
街路にそって立つ櫻の並木
そこにも無数の雀がさへづつてゐるではないか。

ああ このおほきな都會の夜にねむれるものは
ただ一匹の青い猫のかげだ
かなしい人類の歴史を語る猫のかげだ
われらの求めてやまざる幸福の青い影だ。
いかならん影をもとめて
みぞれふる日にもわれは東京を戀しと思ひしに
そこの裏町の壁にさむくもたれてゐる
このひとのごとき乞食はなにの夢を夢みて居るのか。

月夜

二六八

重たいおほきな翅をばたばたして

ああ なんといふ弱々しい心臓の所有者だ。

花瓦斯のやうな明るい月夜に

白くながれてゆく生物の群をみよ

そのしづかな方角をみよ

この生物のもつひとつのせつなる情緒をみよ。

あかるい花瓦斯のやうな月夜に

ああ なんといふ悲しげな いぢらしい蝶類の騷擾だ。

春の感情

ふらんすからくる煙草のやにのほひのやうだ

そのにほひをかいでゐると気がうつとりとする。

うるはしい かなしい さまざまのいりこみたる空の感情

つめたい銀いろの小鳥のなきごゑ

春がくるときのよろこびは

あらゆるひとのいのちをふきならす笛のひびきのやうだ。

ふるゑる めづらしい野路のくさばな

二六九

おもたく雨にぬれた空気の中にひろがるひとつの音色
 なやましき女のなきごゑはそこにもきこえて
 春はしつとりとふくらんでくるやうだ。

春としなれば山奥のふかい森の中でも
 くされた木株の中でもうごめくみみずのやうに
 私^{わたし}のたましひはぞくぞくとして菌^{きのこ}を吹き出す
 たとへば毒^{どく}だけへびだけべにひめぢのやうなもの
 かかる菌の類はあやしげなる色香をはなちて
 ひねもすさびしげに匂つてゐる。

春がくる 春がくる

春がくるときのよろこびは あらゆるひとのいのちを吹きならす

笛のひびきのやうだ

そこにもここにも

ぞくぞくとしてふきだす菌^{きのこ} 毒^{どく}だけ

また藪かげに生えてほのかに光るべにひめぢの類。

野原に寝る

この感情の伸びてゆくありさま
 まつすぐに伸びてゆく喬木のやうに
 いのちの芽生のぐんぐんとのびる
 その青空へもせいのみをすればとどくやうに
 せいも高くなり胸はばもひろくなつた。
 たいさううらかな春の空気をすひこんで

小鳥たちが喰べものをたべるやうに
 愉快で口をひらいてかわゆらしく
 どんなにいのちの芽生たちが伸びてゆくことか。
 草木は草木でいつさいに
 ああ どんなにぐんぐんと伸びてゆくことか。
 ひろびろとした野原にねころんで
 まことに愉快な夢をみつづけた。

蠅の唱歌

二七四

春はどこまで来たか

春はそこまできて櫻の匂ひをかぐはせた

子供たちのさけびは野に山に

はるやま見れば白い浮雲がながれてゐる。

さうして私の心はなみだをおぼえる

いつもおとなしくひとりで遊んでゐる私のこころだ

この心はさびしい

この心はわかき少年の昔より私のいのちに日影をおとした

しだいにおほきくなる孤獨の日かげ

おそろしい憂鬱の日かげはひろがる。

いま室内にひとりで坐つて

暮れてゆくたましひの日かげをみつめる

そのためいきはさびしくして

とごまる蠅のやうに力がない。

しづかに暮れてゆく春の夕日の中を

私のいのちは力なくさまよひあるき

私のいのちは窓の硝子にとどまりて

たよりなき子供等のすすりなく唱歌をきいた。

二七五

恐ろしく憂鬱なる

二七六

こんもりとした森の木立のなかで
いちめん白い蝶類が飛んでゐる。
むらがる　むらがりて飛びめぐる
てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ
みどりの葉のあつぼつたい隙間から
ぴか　ぴか　ぴか　ぴかと光る　そのちひさな鋭い翼つばさ
いつほいにひろがつてとびめぐる　てふ　てふ　てふ
てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ　てふ

ああ　これはなんといふ憂鬱な幻だ
このおもたい手足　おもたい心臓
かぎりなくなやましい物質と物質との重なり
ああ　これはなんといふ美しい病氣だらう
つかれはてたる神経のなまめかしいたそがれどきに
私はみる　ここに女たちの投げ出したおもたい手足
つかれはてた股ももや乳房のなまめかしい重たさを
その鮮血のやうなくちびるはここにかしこに
私の青ざめた屍體のくちびるに
額に　髪に　髪の毛に　股に　胯に　腋の下に　足くびに　足のう

二七七

らにみぎの腕にも ひだりの腕にも 腹のうへにも押しあひて
息ぐるしく重なりあふ

むらがりむらがる 物質と物質との淫猥なるかたまり
ここにかしこに追ひみだれたる蝶のまつくろい集團

ああこの恐ろしい地上の陰影

このなまめかしいまぼろしの森の中に

しだいにひろがつてゆく憂鬱の日かげをみつめる

その私の心はばたばたと羽ばたきして

小鳥の死ぬるときの醜いすがたのやうだ。

ああこたへがたく悩ましい性の感覺
あまりに恐ろしく憂鬱なる。

註。「てふ」「てふ」はチョーチョーと讀むべからず。蝶の原音は「て・ふ」
である。蝶の翼の空氣をうつ感覺を音韻に寫したものである。

青
猫
(後期)

感覺的憂鬱性！それは櫻のはなの酔えた匂
ひのやうに、白く埃つほい外光の中で、いつ
もなやましい光を感じさせる。

憂鬱なる花見

二八四

憂鬱なる櫻が遠くからにほひはじめた
櫻の枝はいちめんひろがつてゐる
日光はきらきらとしてはなはだまぶしい
私は密閉した家の内部に住み
日毎に野菜をたべ 魚やあひるの卵をたべる
その卵の肉はくさりはじめた
遠く櫻のはなは酔え
櫻のはなの酔えた匂ひはうつたうしい

いまひとびとは帽子をかぶつて外光の下を歩きにでる
さうして日光が遠くにかがやいてゐる
けれども私はこの室内にひとりで坐つて
思ひをはるかなる櫻のはなの下によせ
野山にたはむれる青春の男女によせる
ああいかに幸福なる人生がそこにあるか
なんといふよろこびが輝やいてゐることか
いちめん枝をひろげた櫻の花の下で
わかい娘たちは踊ををどる
娘たちの白くみがいた踊の手足

二八五

しなやかにおよげる衣裳

ああ そこにもここにも どんなにうつくしい曲線がもつれあつて
あることか

花見のうたごゑは横笛のやうにのどかで

かぎりなき憂鬱のひびきをもつてきこえる。

いま私の心は涙をもてぬぐはれ

閉ぢこめたる窓のほとりに力なくすすりなく

ああこのひとつのまづしき心はなにもこの生命をもとめ

なにももの影をみつめて泣いてゐるのか

ただいちめんに酔えくされたる美しい世界のはてで

遠く花見の憂鬱なる横笛のひびきをきく。

夢にみる空家の庭の秘密

その空家の庭に生えこむものは松の木の類

枇杷の木 桃の木 まきの木 さざんか さくらの類

さかんな樹木 あたりにひろがる樹木の枝

またそのむらがる枝の葉かげに ぞくぞくと繁茂するところの植物

およそ しだ わらび ぜんまい もうせんごけの類

地べたいちめんに重なりあつて這ひまはる

それら青いものの生命

それら青いもののさかんな生活

その空家の庭はいつも植物の日影になつて薄暗い
ただかすかにながれるものは一筋の小川のみづ 夜も
晝もさよさよと悲しくひくくながれる水の音

またじめじめとした垣根のあたり

なめくぢ へび かへる とかげ のぬたぬたとした氣味わるいす
がたをみる

さうしてこの幽邃な世界のうへに

夜は青じろい月の光がてらしてゐる

月の光は前栽の植込からしつとりとながれこむ。

あはれにしめやかな この深夜のふけてゆく思ひに心をかたむけ

わたしの心は垣根にもたれて横笛を吹きすさぶ

ああ このいろいろのもののかくされた祕密の生活

かぎりなく美しい影と 不思議なすがたの重なりあふところの世界

月光の中にうかびいづる羊齒 わらび 松の木の枝

なめくぢ へび とかげ の不氣味な生活

ああ わたしの夢によくみる このひと棲まぬ空家の庭の祕密と
いつもその謎のとけやらぬおもむき深き幽邃のなつかしさよ。

黒い風琴

二九〇

おるがんをお弾きなさい 女のひとよ
あなたは黒い着物をきて
おるがんの前に坐りなさい
あなたの指はおるがンを這ふのです
かるく やさしく しめやかに 雪のふつてゐる音のやうに
おるがんをお弾きなさい 女のひとよ。
だれがそこで唱つてゐるの
だれがそこでしんみりと聽いてゐるの

ああこのまつ黒な憂鬱の闇のなかで
べつたりと壁にすひついて
おそろしい巨大の風琴を弾くのはだれですか
宗教のはげしい感情 そのふるゑ
けいれんするはいおるがん れくれえむ！
お祈りなさい 病氣のひとよ
おそろしいことはない おそろしい時間はないのです
お弾きなさい おるがんを
やさしく とうえんに しめやかに
大雪のふりつむときの松葉のやうに
あかるい光彩をなげかけてお弾きなさい

二九一

お弾きなさい おるがんを
おるがんをお弾きなさい 女のひとよ。

ああ まつくろのながい着物をきて
しぜんに感情のしづまるまで
あなたはおほきな黒い風琴をお弾きなさい
おそろしい暗闇の壁の中で
あなたは熱心に身をなげかける
あなた！
ああ なんといふはげしく陰鬱なる感情のけいれんよ。

憂鬱の川邊

川邊で鳴つてゐる
蘆や葦のさやさやといふ音はさびしい
しぜんに生えてる
するとい ちひさな植物 草本さうぼんの莖かきの類はさびしい
私は眼を閉ぢて
なにかの草の根を噛まうとする
なにかの草の汁をすふために 憂愁の苦い汁をすふために
げにそこにはなにごとの希望もない
生活はただ無意味な憂鬱の連なりだ

梅雨だ

じめじめとした雨の点滴のやうなものだ
しかし ああ また雨！ 雨！ 雨！
そこには生える不思議の草本
あまたの悲しい羽蟲の類
それは憂鬱に這ひまはる 岸邊にそうて這ひまはる
じめじめとした川の岸邊を行くものは
ああこの光るいのちの葬列か
光る精神の病靈か
物みなしぜんに腐れゆく岸邊の草むら
雨に光る木材質のはげしき匂ひ。

佛の見たる幻想の世界

花やかな月夜である
しんめんたる常盤木の重なりあふところで
ひきさりまたよせかへす美しい浪をみるところで
かのなつかしい宗教の道はひらかれ
かのあやしげなる聖者の夢はむすばれる。
げにそのひとの心をながれるひとつの愛憐
そのひとの瞳孔にうつる不死の幻想
あかるくてらされ

またさびしく消えさりゆく夢想の幸福とその怪しげなるかげかたち
ああ そのひとについて思ふことは
そのひとの見たる幻想の國をかんずることは
どんなにさびしい生活の日暮れを色づくことぞ
いま疲れてながく孤獨の椅子に眠るとき
わたしの家の窓にも月かげさし
月は花やかに空にのぼつてゐる。

佛よ

わたしは愛する おんみの見たる幻想の蓮の花弁を
青ざめたるいのちに咲ける病熱の花の香氣を

佛よ

あまりに花やかにして孤獨なる。

鶏

二九八

しのめきたるまへ
家家の戸の外で鳴いてゐるのは鶏けいです
聲をばながくふるはして
さむしい田舎の自然からよびあげる母の聲です
とをてくう とをるもう とをるもう。

朝のつめたい臥床ふしどの中で
私のたましひは羽ばたきをする

この雨戸の隙間からみれば
よもの景色はあかるくかがやいてゐるやうです
されどもしのめきたるまへ
私の臥床にしのびこむひとつの憂愁
けぶれる木木の梢をこえ
遠い田舎の自然からよびあげる鶏けいのこゑです
とをてくう とをるもう とをるもう。

戀びとよ

戀びとよ

二九九

有明のつめたい障子のかげに

私がかぐ ほのかなる菊のにほひを

病みたる心霊のにほひのやうに

かすかにくされゆく白菊のはなのにはひを

戀びとよ

戀びとよ

しののめきたるまへ

私の心は墓場のかげをさまよひあるく

ああ なにものか私をよぶ苦しきひとつの焦燥

このうすい紅べにいろの空氣にはたへられない

戀びとよ

母上よ

早くきてもしびの光を消してよ

私はきく 遠い地角のはてを吹く大風たいふうのひびきを

とをてくう とをるもう とをるもう。

みじめな街燈

雨のひどくふつてる中で
道路の街燈はびしよびしよにぬれ
やくざな建築は坂に傾斜し へしつぶされて歪んでゐる
はうはうぼうぼうとした煙霧の中を
あるひとの運命は白くさまよふ
そのひとは大外套に身をくるんで
まづしく みすばらしい鳶とんびのやうだ

とある建築の窓に生えて
風雨にふるふる ずつくりぬれた青樹をながめる。
その青樹の葉つはがかれを手招き
かなしい雨の景色の中で
厭いとやらしく 靈魂たましひのぞつとするものを感じさせた。
さうしてびしよびしよに濡れてしまった。
影も からだも 生活も 悲哀でびしよびしよに濡れてしまった。

恐ろしい山

恐ろしい山の相貌をみた

まつ暗な夜空にけむりを吹きあげてゐる

おほきな蜘蛛のやうな眼である。

赤くちろちろと舌をだして

うみざりがにのやうに平つくばつてゐる。

手足をひろくのばして麓いちめん^に這ひ廻つた

さびしくおそろしい闇夜である

がうがうといふ風が草を吹いてる 遠くの空で吹いてる。

自然はひつそりと息をひそめ

しだいにふしぎな 大きな山のかたちが襲つてくる。

すぐ近いところにそびえ

怪異な相貌が食はうとする。

題のない歌

南洋の日にやけた裸か女のやうに
夏草の茂つてゐる波止場の向うへ　ふしぎな赤錆びた汽船がはひつ
てきた
ふはふはとした雲が白くたちのぼつて
船員のすふ煙草のけむりがさびしがつてる。

わたしは鶉のやうに羽ばたきながら
さうして丈の^{たけ}高い野茨の上を飛びまはつた。
ああ　雲よ　船よ　どこに彼女は航海の碇をすてたか
ふしぎな情熱になやみながら
わたしは沈黙の墓地をたづねあるいた
それはこの草叢^{くさむら}の風に吹かれてゐる
しづかに　錆びついた　戀愛鳥の木乃伊^{みい}であつた

艶めかしい墓場

三〇八

風は柳を吹いてゐます

どこにこんな薄暗い墓地の景色があるのだらう。

なめくぢは垣根を這ひあがり

見はらしの方から生あつたかい潮みづがにほつてくる。

どうして貴女はここに來たの

やさしい 青ざめた 草のやうにふしぎな影よ。

貴女は貝でもない 雉でもない 猫でもない

さうしてさびしげなる亡霊よ

貴女のさまよふからだの影から

まづしい漁村の裏通りで 魚のくさつた臭ひがする

その腸は日にとけてどろどろと生臭く

かなしく せつなく ほんとにたへがたい哀傷のにほひである。

ああ この春夜のやうになまぬるく

べにいろのあでやかな着物をきてさまよふひとよ

妹のやうにやさしいひとよ

それは墓場の月でもない 燐でもない 影でもない 眞理でもない

さうしてただなんといふ悲しさだらう。

かうして私の生命や肉體はくさつてゆき

「虚無」のおぼろげな景色のかげで

艶めかしくも ねばねばとしなだれて居るのですよ。

三〇九

くづれる肉體

蝙蝠のむらがつてゐる野原の中で
 わたしはくづれてゆく肉體の柱をながめた
 それは宵闇にさびしくふるゑて
 影にそよぐ死びと草のやうになまぐさく
 ぞろぞろと蛆蟲の這ふ腐肉のやうに醜くかつた。

ああこの影を曳く景色のなかで
 わたしの靈魂はむづがゆい恐怖をつかむ
 それは港からきた船のやうに 遠く亡靈のある島々を渡つてきた
 それは風でもない 雨でもない
 そのすべては愛欲のなやみにまつはる暗い恐れだ
 さうして蛇つかひの吹く鈍い音色に
 わたしのくづれてゆく影がさびしく泣いた。

鴉毛の婦人

やさしい鴉毛の婦人よ
わたしの家根裏の部屋にしのおんできて
麝香のなまめかしい匂ひをみたま
貴女はふしぎな夜鳥

木製の椅子にさびしくとまつて
その嘴は心臓をついばみ 瞳孔はしづかな涙にあふれる
夜鳥よ
このせつない戀情はどこからくる
あなたの憂鬱なる衣裳をぬいで はや夜露の風に飛びされ。

緑色の笛

この黄昏の野原のなかを
 耳のながい象たちがぞろりぞろりと歩いてゐる。
 黄色い夕月が風にゆらいで
 あちこちに帽子のやうな草つばがひらひらする。
 さびしいですか お嬢さん！
 ここに小さな笛があつて その音色は澄んだ緑です。

やさしく歌口をお吹きなさい
 とうめいなる空にふるゑて
 あなたの蜃氣樓をよびよせなさい
 思慕のはるかな海の方から
 ひとつの幻像がしだいにちかづいてくるやうだ。
 それなくびのない猫のやうで 墓場の草影にふらふらする
 いつそこんな悲しい暮景中で 私は死んでしまひたいのです。お嬢
 さん！

寄生蟹のうた

潮みづのつめたくながれて
 貝の齒はいたみに齧ばみ酢のやうに溶けてしまつた。
 ああここにはもはや友だちもない 戀もない
 渚にぬれて亡靈のやうな草を見てゐる
 その草の根ほけむりのなかに白くかすんで

春夜のなまぬるい戀びとの吐息のやうです。
 おぼろにみえる沖の方から
 船人はふしぎな航海の歌をうたつて 拍子も高く楫の音がきこえてくる。

あやしくもこの磯邊にむらがつて
 むらむらとうづ高くもりあがり また影のやうに這ひまはる
 それは雲のやうなひとつの心像 さびしい寄生蟹の幽霊ですよ。

かなしい囚人

かれらは青ざめたしやつほをかぶり
うすぐらい尻尾しつぽの先を曳きずつて歩きまはる
そしてみよ そいつの陰鬱いんうつなしやべるが泥土ぬつちを掘るではないか。
ああ草の根株は掘つくりかへされ
どこもかしこも曇暗どんあんな日ざしがかげつてゐる。

なんとといふ退屈たいくつな人生だらう
ふしぎな葬式そうしきのやうに列をつくつて 大きな建物の影へ出這入りする。
この幽霊ゆうれいのやうにさびしい影だ
硝子のびかびかするかなしい野外で
どれも青ざめた紙のしやつほをかぶり
ぞろぞろと蛇の卵たまごのやうにつながつてくる さびしい囚人の群ではな
いか。

猫柳

つめたく青ざめた顔のうへに
け高くにはふ優美の月をうかべてゐます
月のはづかしい面影
やさしい言葉であなたの死骸に話しかける。
ああ 露しげく
しつとりとぬれた猫柳 夜風のなかに動いてゐます。
ここをさまよひきたりて

うれしい情なさけのかずかずを歌ひつくす
そは人の知らないさびしい情慾 さうして情慾です。
ながれるごとき涙にぬれ
私はくちびるに血汐をぬる
ああ なにといふ戀しさなるぞ
この青ざめた死霊にすがりつきてもてあそぶ
夜風にふかれ
猫柳のかげを暗くさまよふよ そは墓場のやさしい歌ごゑです。

憂鬱な風景

猫のやうに憂鬱な景色である

さびしい風船はまっすぐに昇つてゆき

りんねるいんねるを着た人物がちらちらと居るではないか。

もうとつくにながい間あひだ

だれもこんな波止場を思つてみやしない。

さうして荷揚機械のぼうぜんとしてゐる海角から

いろいろさまざまな生物意識が消えて行つた。

そのうへ帆船には綿が積まれて

それが沖の方でむくむくと考へこんでゐるではないか。

なんと言ひやうもない

身の毛もよだち ぞつとするやうな思ひ出ばかりだ。

ああ神よ もうとりかへすすべもない

さうしてこんなむしばんだ回想から いつも幼な兒のやうに泣いて
みよう。

野鼠

どこに私らの幸福があるのだらう
泥土どいどの砂を掘れば掘るほど
悲しみはいよいよふかく湧いてくるではないか。
春は幔幕のかけにゆらゆらとして
遠く俤にゆすられながら行つてしまつた。
どこに私らの戀人があるのだらう

ばうばうとした野原に立つて口笛をふいてみても
もう永遠に空想の娘らは來やしない。
なみだによごれためるとんのづぼんをはいて
私は日傭人ひようじんのやうに歩いてゐる
ああもう希望もない 名譽もない 未來もない。
さうしてとりかへしのつかない悔恨ばかりが
野鼠のやうに走つて行つた。

五月の死びこ

三二六

この生いきづくりにされたからだは
きれいに しめやかに なまめかしくも彩色されてる
その胸も その唇も その顔も その腕も
ああ みなどこもしつとりと膏油や刷毛で塗られてゐる。
やさしい五月の死びとよ
わたしは緑金の蛇のやうにのたうちながら
ねばりけのあるものを感觸し
さうして「死」の絨毯に肌身をこすりねりつけた。

青空

このながい煙筒えんとうは
をんのな圓い腕のやうで
空によつきり
空は青明な弧球ですが
どこにも重心の支へがない。
この全景は象のやうで
妙に膨大の夢をかんじさせる。

三二七

輪廻と轉生

地獄の鬼がまわす車のやうに
冬の日はごろごろとさびしくまわつて
輪廻りんねの小鳥は砂原のかけに死んでしまつた。
ああ こんな陰鬱な季節がつづくあひだ
私は幻の駱駝にのつて
ふらふらとかなしげな旅行にしようとする。

どこにこんな荒寥の地方があるのだらう
年をとつた乞食の群は
いくたりとなく隊列のあとをすぎさつてゆき
秃鷹の屍肉にむらがるやうに
きたない小蟲が焼地やけどの穢土けんどにむらがつてゐる。
なんといいふいたましい風物だらう
どこにもくびのながい花が咲いて
それがゆらゆらと動いてゐる
考へることもない かうして暮れ方ぐれかたがちかづくのだらう
戀や孤獨やの一生から

はりあひのない心像も消えてしまつて ほんかに幽霊のやうに見え
るばかりだ。

どこを風見の鶏とりが見てゐるのか
冬の日のごろごろと廻る瘠地の丘で もろこしの葉が吹かれてゐる。

厭やらしい景物

雨のふる間

眺めは白ぼけて

建物 建物 びたびたにぬれ

さみしい荒廢した田舎をみる

そこに感情をくさらして

かれらは馬のやうにくらしてゐた。

私は家の壁をめぐり

家の壁に生える苔をみた
かれらの食物は非常にわるく
精神さへも梅雨^{つゆ}じみて居る。
雨のながくふる間

私は退屈な田舎にゐて
退屈な自然に漂泊してゐる
薄ちやけた幽霊のやうな影をみた。

私は貧乏を見たのです
このびたびたする雨氣の中に

ずつくり濡れたる 孤獨の 非常に厭やらしいものを見たのです。

さびしい來歴

むくむくと肥えふとつて
 白くくびれてゐるふしぎな球形の幻像よ
 それは耳もない 顔もない つるつるとして空にのぼる野鳶のやうだ
 夏雲よ なんとるとりとめのない寂しさだらう
 どこにこれといふ信仰もなく たよりに思ふ戀人もありはしない。

わたしは駱駝のやうによるめきながら
 椰子の實の日にやけた核たを噛みくだいた。
 ああ こんな乞食みたいな生活から
 もうなにもかもなくしてしまつた
 たうとう風の死んでる野道へきて
 もろこしの葉うらにからびてしまつた。
 なんとといふさびしい自分の來歴だらう。

怠惰の暦

いくつかの季節はすぎ

もう憂鬱の櫻も白つほく腐れてしまつた

馬車はごろごろと遠くをはしり

海も 田舎も ひつそりとした空気の中に眠つてゐる。

なんとといふ怠惰な日だらう

運命はあとからあとからとかげつてゆき

さびしい病鬱は柳の葉かげにけむつてゐる。

もう曆もない 記憶もない

わたしは燕のやうに巢立ちをし さうしてふしぎな風景のはてを翔

つてゆかう。

むかしの戀よ 愛する猫よ

わたしはひとつの歌を知つてゐる

さうして遠い海草の焚けてる空から 爛れるやうな接吻を投げよう

ああ このかなしい情熱の外 どんな言葉も知りはない。

閑雅な食慾

松林の中を歩いて
あかるい氣分の珈琲店をみた。
遠く市街を離れたところで
だれも訪づれてくるひとさへなく
林間の　かくされた　追憶の　夢の中の珈琲店である。

をとめは戀戀の差をふくんで
あけぼののやうに爽快な　別製の皿を運んでくる仕組
私はゆつたりとふほふくを取つて
おむれつ　ふらいの類を喰べた。
空には白い雲が浮んで
たいさう閑雅な食慾である。

馬車の中で

馬車の中で

私はすやすやと眠つてしまつた。

きれいな婦人よ

私をゆり起してくださいな

明るい街燈の巷ちまたをはしり

すずしい緑蔭の田舎をすぎ

いつしか海の匂ひも行手にちかくそよいでゐる。

ああ蹄ひづりの音もかつかつとして

私はうつつにうつつを追ふ

きれいな婦人よ

旅館の花ざかりなる軒にくるまで

私をゆり起してくださいな。

最も原始的な情緒

この密林の奥ふかくに

おほきな護謨葉樹のしげれるさまは

ふしぎな象の耳のやうだ。

薄闇の湿地にかげをひいて

ぞくぞくと這へる羊齒植物 爬蟲類

蛇 とかげ むもり 蛙 さんしよをの類。

白晝のかなしい思慕から
なにをあたむが追憶したか
原始の情緒は雲のやうで
むげんにいとしい愛のやうで
はるかな記憶の彼岸にうかんで
とらへどころもありはしない。

天候と思想

書生は陰氣な寢臺から
家畜のやうに這ひあがつた
書生は羽織をひっかけ
かれの見る自然へ出かけ突進した。
自然は明るく小綺麗でせいせいとして
そのうへにも匂ひがあつた

森にも 辻にも 賣店にも
どこにも青空がひるがへりて美麗であつた
そんな輕快な天氣に
美麗な自動車^かが 娘等^かがはしり廻つた。
わたくし思ふに
思想はなほ天候のやうなものであるか
書生は書物を日向にして
ながく幸福のにはひを嗅いだ。

笛の音のする里へ行かうよ

三四六

俣に乗つてはしつて行くとき
野も 山も ばうばうとして霞んでみえる
柳は風にふきながされ
燕も 歌も ひよ鳥も かすみの中に消えさる。
ああ 俣のはしる轍わだかを透して
ふしぎな ばうばくたる景色を行手にみる

その風光は遠くひらいて
さびしく憂鬱な笛の音を吹き鳴らす
ひとのしのびて耐へがたい情緒である。

このへんでこなる方角をさして行け
春の朧げなる柳のかげで 歌も燕もふきながされ
わたしの俣やさんはいつしんですよ。

三四七

蒼ざめた馬

冬の曇天の 凍りついた天氣の下で
そんなに憂鬱な自然の中で
だまつて道ばたの草を食つてる
みじめな しょんぼりした 宿命の 因果の 蒼ざめた馬の影です
わたしは影の方へうごいて行き
馬の影はわたしを眺めてゐるやうす。

ああはやく動いてそこを去れ
わたしの生涯の映畫膜から
すぐに すぐに 外りさつてこんな幻像を消してしまへ
私の「意志」を信じたいのだ。馬よ！
因果の 宿命の 定法の みじめなる
絶望の凍りついた風景の乾板から
蒼ざめた影を逃走しろ。

思想は一つの意匠であるか

鬱蒼としげつた森林の樹木のかげで
ひとつの思想を歩ませながら
佛は蒼明の自然を感じた
どんな瞑想をもいきいきとさせ

どんな涅槃にも溶け入るやうな
そんな美しい月夜をみた。

「思想は一つの意匠であるか」
佛は月影を踏み行きながら
かれのやさしい心にたづねた。

顔

ねぼけた櫻の咲くころ
白いぼんやりした顔がうかんで
窓で見えてゐる。
ふるいふるい記憶のかげで
どこかの波止場で逢つたやうだが

董の病鬱の匂ひがする
外光のきらきらする硝子窓から
ああ遠く消えてしまつた 虹のやうに。
私はひとつの憂ひを知る
生涯ちいよのうす暗い隅を通つて
ふたたび永遠にかへつて來ない。

白い雄鶏

わたしは田舎の鶏はとどりです
まづしい農家の庭に羽はたきし
垣根をこえて
わたしは乾ひからびた小蟲をついばむ。
ああ この冬の日の陽ざしのかげに
さびしく乾地の草をついばむ

わたしは白つほい病氣の雄鶏おんどり
あはれな かなしい 羽ばたきをする生物いきものです。
私わたしはかなしい田舎の鶏はとどり
家根をこえ
垣根をこえ
墓場をこえて
はるか野末にふるるさけぶ
ああ私はこはれた日時計 田舎の白つほい雄鶏おんどりです。

囀鳥

軟風のふく日
暗鬱な思惟にしづみながら
しづかな木立の奥で落葉する路を歩いてゐた。
天氣はさつぱりと晴れて
赤松の梢にかたく囀鳥の騒ぐをみた
愉快な小鳥は胸をはつて

ふたたび情緒の調子をかへた。
ああ 過去の私の鬱陶しい瞑想から 環境から
どうしてけふの情感をひるがへさう
かつてなにものすら失つてゐない
人生においてすら。
人生においてすら 私の失つたのは快適だけだ
ああしかし あまりにひさしく快適を失つてゐる。

悪い季節

三五八

薄暮の疲労した季節がきた

どこでも室房はうす暗く

慣習のながい疲れをかんずるやうだ

雨は往來にびしよびしよして

貧乏な長屋が並びてゐる。

こんな季節のながいあひだ

ぼくの生活は落魄して

ひどく窮乏になつてしまつた

家具は一隅に投げ倒され

冬の 埃の 薄命の日ざしのなかで

蠅はぶむぶむと窓に飛んでる。

こんな季節のつづく間

ぼくのさびしい訪問者は

老年の よぼよぼした いつも白粉くさい貴婦人です。

ああ彼女こそ僕の昔の戀人

古ぼけた記憶の かあてんの影をさまよひあるく情慾の影の影だ。

三五九

こんな白雨のふつてる間
どこにも新しい信仰はありはしない
詩人はありきたりの思想をうたひ
民衆のふるい傳統は疊の上になやんでゐる
ああこの厭やな天氣
日ざしの鈍い季節。

ぼくの感情を燃え爛すやうな構想は
ああもう どこにだつてありはしない。

遺傳

人家は地面にへたばつて
おほきな蛛蜘蛛のやうに眠つてゐる。
さびしいまつ暗な自然の中で
動物は恐れにふるふる
なにかの夢魔におびやかされ
かなしく青ざめて吠えてゐます。
のをあある とをあある やわあ

もろこしの葉は風に吹かれて
さわさわと闇に鳴つてる。

お聴き！ しづかにして

道路の向うで吠えてゐる

あれは犬の遠吠だよ。

のをあある とをあある やわあ

「犬は病んでゐるの？ お母あさん。」

「いいえ子供

犬は飢ゑてゐるのです。」

遠くの空の微光の方から

ふるふる物象のかげの方から

犬はかれらの方を眺めた

遺傳の 本能の ふるいふるい記憶のはてに

あはれな先祖のすがたをかんじた。

犬のこころは恐れに青ざめ

夜陰の道路にながく吠える。

のをあある とをあある のをあある やわああ

「犬は病んでゐるの？ お母あさん。」

「いええ子供

犬は飢ゑてゐるのですよ。」

自然の背後に隠れて居る

僕等が藪のかげを通つたとき

まつくらの地面におよいでゐる

およおよとする象像かたちをみた

僕等は月の影をみたのだ。

僕等が草叢をすぎたとき

さびしい葉ずれの隙間から鳴る

そわそわといふ小笛をきいた。

僕等は風の聲をみたのだ。

僕等はたよりない子供だから
僕等のあはれな感觸では
わづかな現はれた物しか見えはしない。
僕等は遙かの丘の向うで
ひろびろとした自然に棲んでる
かくれた萬象の密語をきき
見えない生き物の動作をかんじた。

僕等は電光の森かげから
夕闇のくる地平の方から

煙の淡じろい影のやうで
しだいにちかづく巨像をおぼえた
なにかの妖しい相貌すがたに見える
魔物の迫れる恐れをかんじた。

おとなの知らない希有きゆうの言葉で
自然は僕等をおびやかした
僕等は葦のやうにふるゑながら
さびしい曠野に泣きさげんだ。

「お母ああさん！ お母ああさん！」

艶めける靈魂

そよげる

やはらかい草の影から

花やかに いきいきと目をさましてくる情慾

燃えあがるやうに

たのしく

うれしく

こころ春めく春の感情。

つかれた生涯せいふのあぢない晝にも

孤獨の暗い部屋の中にも

しぜんとやはらかく そよげる窓の光はきたる

いきほひたかぶる機能の昂進

そは世に艶めけるおもひのかざりだ

勇氣にあふれる希望のすべてだ。

ああこのわかやげる思ひこそは

春日にとける雪のやうだ

やさしく芽ぐみ

しぜんに感ずるぬくみのやうだ

たのしく
うれしく
こころときめく性の躍動。

とざせる思想の底を割つて
しづかにながれるいのちをかんずる
あまりに憂鬱のなやみふかい沼の底から
わづかに水のぬくめるやうに
さしぐみ
はぢらひ
ためらひきたれる春をかんずる。

花やかなる情緒

深夜のしづかな野道のほとりで
さびしい電燈が光つてゐる
さびしい風がふきながれる
このあたりの山には樹木が多く
檜、檜、山毛櫸、檜、櫸の類
枝葉もしげく鬱蒼ともつてゐる。

そこやかしこの暗い森から
また遙かなる山山の麓の方から

さびしい弧燈をめあてとして
 むらがりつごへる蛾をみる。
 蝗いなせのおそろしい群のやうに
 光にうづまき くるめき 押しあひ死にあふ小蟲の群團。

人里はなれた山の奥にも
 夜ふけてかがやく弧燈をゆめむ。
 さびしい花やかな情緒をゆめむ。
 さびしい花やかな燈火あかりの奥に
 ふしぎな性の悶えをかんじて
 重たい翼つばさをばたばたさせる

かすてらのやうな蛾をみる
 あはれな 孤獨の あこがれきつたいのちをみる。

いのちは光をさして飛びかひ
 光の周圍にむらがり死ぬ
 ああこの賑はしく 艶めかしげなる春夜の動靜
 露つほい空氣の中で
 花やかな弧燈は眠り 燈火はあたりの自然にながれてゐる。
 ながれてゐる哀傷の夢の影のふかいところで
 私はときがたい神祕をおもふ

萬有の 生命の 本能の 孤獨なる
永遠に永遠に孤獨なる 情緒のあまりに花やかなる。

片戀

市街を遠くはなれて行つて
僕等は山頂の草に坐つた
空に風景はふきながされ
ぎぼし ゆきしだ わらびの類
ほそくさよさよと草地に生えてる。
君よ 辨當をひらき
はやくその卵を割つてください。
私の食慾は光にかつる

あなたの白い指にまつはる
果物の皮の甘味にこがれる。

三七六

君よ なぜ早く籠をひらいて
鶏肉の 腸詰の 砂糖煮の 乾酪（かひ）のご馳走をくれないのか
ぼくは飢ゑ
ぼく的情慾は身をもたえる。

君よ

君よ

疲れて草に投げ出してゐる

むつちりとした手足のあたり
ふらんねるをきた胸のあたり
ぼくの愛着は熱奮して 高潮して
ああこの苦しい 壓迫にはたへられない。

高原の草に坐つて

あなたはなにを眺めてゐるのか
あなたの思ひは風にながれ
はるか市街は空にかかべる
ああ ぼくのみひとり焦燥して

三七七

この青青とした草原の上
かなしい願望に身をもたえる。

夢

あかるい屏風のかげにすわつて
あなたのしづかな寢息をきく。
香爐のかなしいけむりのやうに
そこはかとたちまよふ
女性のやさしい匂ひをかんずる。
かみの毛ながきあなたのそばに
睡魔のしぜんな言葉をきく

あなたはふかい眠りにおち
わたしはあなたの夢をかんがふ
このふしぎなる情緒
影なきふかい想ひはどこへ行くのか。
薄暮のほの白いうれひのやうに
はるかに幽かな湖水をながめ
はるばるさみしい麓をたどつて
見しらぬ遠見の山の峠に
あなたはひとり道にまよふ 道にまよふ。

ああ なににあこがれもとめて
あなたはいつこへ行かうとするか
いつこへ いつこへ 行かうとするか
あなたの感傷は夢魔に籠ゑて
白菊の花のくさつたやうに
ほのかに神祕なにほひをたたふ。

(とりとめもない夢の気分とその抒情)

春宵

三八二

媚めかしくも媚ある風情を
しつとりとした襦袢につつま
くびれたごむの 跳ねかへす若い肉體を
こんな近く抱いてるうれしさ
あなたの胸は鼓動にたかまり
その手足は肌にあふれ
ほのかにつめたく やさしい感觸の匂ひをつたふ。

ああ この溶けてゆく春夜の灯かげに
厚くしつとりと化粧されたる
ひとつの白い額をみる
ちひさな可愛いくちびるをみる
まぼろしの夢に浮んだ顔をながめる。

春夜のただよふ霧の中で
わたしはあなたの思ひをかぐ
あなたの思ひは愛にめぐめて
はつちりとひらいた黒い瞳は
夢におどろき

三八三

みしらぬ歡樂をあやしむやうだ。

しづかな情緒のながれを通つて

ふたりの心にしみゆくもの

ああ このやすらかな やすらかな

すべてを愛に 希望にまかせた心はどうだ。

人生の春のまたたく灯かげに

嬌めかしくも媚ある肉體を

こんなに近く抱いてるうれしさ

處女のやはらかな肌のにほひは

花園にそよげるばらのやうで

情愁のなやましい性のきざしは

櫻のはなの咲いたやうだ。

軍隊

通行する軍隊の印象

三八六

この重量のある機械は
地面をどつしりと壓へつける
地面は強く踏みつけられ
反動し
濛濛とする埃をたてる。
この日中を通つてゐる
巨重の逞ましい機械をみよ
黝鐵の油ぎつた

ものすごい頑固な巨體だ
地面をどつしりと壓へつける
巨きな集團の動力機械だ。
づしり、づしり、ばたり、ばたり
ざつく、ざつく、ざつく、ざつく。

この兇逞な機械の行くところ
どこでも風景は褪色し
黄色くなり
日は空に沈鬱して
意志は重たく壓倒される。

三八七

づしり、づしり、ばたり、ばたり

お一、二、お一、二。

お この重壓する

おほきなまつ黒の集團

浪の押しかへしてくるやうに

重油の濁つた流れの中を

熱した銃身の列が通る

無数の疲れた顔がる。

ざつく、ざつ通くざつく、ざつく

お一、二、お一、二。

暗澹とした空の下を

重たい鋼鐵の機械が通る

無数の擴大した瞳孔が通る

それらの瞳孔は熱にひらいて

黄色い風景の恐怖のかげに

空しく力なく彷徨する。

疲労し

困憊し

幻惑する。

お一、二、お一、二

歩調取れえ！

お このおびただしい瞳孔

埃の低迷する道路の上に

かれらは憂鬱の日ざしをみる

ま白い幻像の市街をみる

感情の暗く幽囚された。

づしり、づしり、づたり、づたり

ざつく、ざつく、ざつく、ざつく。

いま日中を通行する

黝鐵の凄く油ぎつた

巨重の逞ましい機械をみよ

この兇逞な機械の踏み行くところ

どこでも風景は褪色し

空氣は黄ばみ

意志は重たく壓倒される。

づしり、づしり、づたり、づたり

づしり、どたり、ばたり、ばたり。

おー、二、おー、二。

青
猫
(以後)

桃李の道

——老子の幻想から

聖人よ あなたの道を教へてくれ

繁華な村落はまだ遠く

鶏とりや犢とらの聲さへも霞の中なかにきこえる。

聖人よ あなたの眞理をきかせてくれ。

杏の花のどんよりとした季節のころに

ああ 私は家を出で なにの學問を學んできたか

むなしく青春はうしなはれて

戀も 名譽も 空想も みんな揚柳の牆かきに涸れてしまつた。

聖人よ

日は田舎の野路にまだ高く

村村の娘が唱ふ機歌はたがたの聲も遠くきこえる。

聖人よ どうして道を語らないか

あなたは黙し さうして桃や李なしやの咲いてる夢幻まぼろしの郷さとで

ことばの解き得ぬ認識の玄義を追ふか。

ああ この道徳の人を知らない

晝頃ひるまじになつて村に行き

あなたは農家の庖厨ばうこに坐るでせう。

さびしい路上の聖人よ

わたしは別れ もはや遠くあなたの沓音くつおとを聴かないだらう。

悲しみしのびがたい時でさへも

ああ 師よ！ 私はまだ死なないでせう。

風船乗りの夢

三九八

夏草のしげる叢くさむらから

ふはりふはりと天上さして昇りゆく風船よ

籠には舊曆の曆をのせ

はるか地球の子午線を越えて吹かれ行かうよ。

ばうばうとした虚無の中を

雲はさびしげにながれて行き

草地も見えず 記憶の時計もぜんまいがとまつてしまった。

どこをめあてに翔けるのだらう

さうして酒瓶の底は空しくなり

酔ひどれの見る美麗な幻覺まぼろしも消えてしまった。

しだいに下界の陸地をはなれ

愁ひや雲やに吹きながされて

知覺もおよばぬ真空圏内へまざれ行かうよ。

この瓦斯體もてふくらんだ氣球のやうに

ふしぎにさびしい宇宙のはてを

友だちもなく ふはりふはりと昇つて行かうよ。

三九九

古風な博覽會

かなしく ぼんやりとした光線のさすところで
圓頂塔の上に圓頂塔が重なり
それが遠い山脈の方まで續いてゐるではないか。
なんたるさびしげな青空だらう。
透き通つた硝子張りの虚空の下で
あまたのふしぎなる建築が格闘し
建築の腕と腕とが組み合つてゐる。
このしづかなる博覽會の景色の中を

かしこに遠く 正門を過ぎて人人の影は空にちらばふ。
なんたる夢のやうな群集だらう。
そこでは文明のふしぎなる幻燈機械や
天體旅行の奇妙なる見世物をのぞき歩く
さうして西曆千八百十年頃の佛國巴里市を見せるパノラマ館の裏口から
人の知らない祕密の抜穴「時」の胎内へもぐり込んだ。
ああ この消亡をだれが知るか？
圓頂塔の上に圓頂塔が重なり
無限にはるかなる地平の空で
日ざしは悲しげにただよつてゐる。

まごろすの歌

EO11

愚かな海鳥のやうな姿をして
瓦や敷石のごろごろとする港の市街區を通つて行かう。
こはれた幌馬車が列をつくつて
むやみやたらに圓錐形の混雜がやつてくるではないか。
家臺は家臺の上に積み重なつて
なんとといふ人畜のきたなく混雜する往來だらう
見れば大時計の古ぼけた指盤の向うで
冬のさびしい海景が泣いて居るではないか。

涙を路ばたの石にながしながら
私の辮髪を背中にたれて 支那人みたやうに歩いてゐよう。
かうした暗い光線はどこからくるのか
あるひは理髮師や裁縫師の軒に Artist の招牌をかけ
野菜料理や木造旅館の貧しい出窓が傾いて居る。
どうしてこんな貧しい「時」の寫眞を映すだらう
どこへもう 外の行くところさへありはしない
はやく石垣のある波止場を曲り
遠く沖にある帆船へかへつて行かう
さうして忘却の錨を解き記録のだんだんと消えさる港を尋ねて行かう

EO11

荒寥地方

EOE

散歩者のうろろと歩いてゐる

十八世紀頃の物さびしい裏街の通りがあるではないか

青や緑や赤やの旗がびらびらして

むかしの出窓に鐵葉の帽子が飾つてある。

どうしてこんな情感のふかい市街があるのだらう

日時計の時刻はとまり

どこに買物をする店や市場もありはしない。

古い砲彈の碎片などが掘り出されて

それが要塞區域の砂の中でまつくろに錆びついてゐたではないか

どうすれば好いのか知らない

かうして人間どもの生活する 荒寥の地方ばかりを歩いてゐよう。

年をとつた婦人のすがたは

家鴨や鶏によく似てゐて

網膜の映るところに眞紅の布がひらひらする。

なんたるかなしげな黄昏だらう

象のやうなものが群がつてゐて

郵便局の前をあちこちと彷徨してゐる。

「ああどこに 私の音づれの手紙を書かう！」

佛陀

或は「世界の謎」

四〇六

赭土の多い丘陵地方の
さびしい洞窟の中に眠つてゐるひとよ
君は貝でもない 骨でもない 物でもない。
さうして磯草の枯れた砂地に
ふるく錆びついた時計のやうでもないではないか。
ああ 君は「真理」の影か 幽霊か

いくとせもいくとせもそこに坐つてゐる
ふしぎの魚のやうに生きてゐる木乃伊よ。
このたへがたくさびしい荒野の涯で
海はかうかうと空に鳴り
大海嘯の遠く押しよせてくるひびきがきこえる。
君の耳はそれを聴くか？
久遠のひと 佛陀よ！

四〇七

ある風景の内殻から

四〇八

どこにこの情慾は口をひらいたら好いだらう
大海龜は山のやうに眠つてゐるし
古生代の海に近く
厚さ千貫目ほどもある鷓鴣の貝殻が眺望してゐる。
なんとといふ鈍暗な日ざしだらう
しぶきにけむれる岬々の島かげから
ふしぎな病院船のかたちが現はれ

それが沈没した錠の纜をずると曳いてゐるではないか。
ねえ！ お嬢さん

いつまで僕等は此處に坐り 此處の悲しい岩に並んでゐるのでせう
太陽は無限に遠く

光線のさしてくるところにぼうぼうといふほら貝が鳴る。

お嬢さん！

かうして寂しくぺんぎん鳥のやうにならんでゐると

愛も 肝臓も つららになつてしまふやうだ。

やさしいお嬢さん！

もう僕には希望もなく 平和な生活の慰めもないのだよ

あらゆることが僕をきちがひじみた憂鬱にかりたてる

四〇九

へんに季節は轉轉して

もう春も李もめちやくちやな妄想の網にこんがらかつた。

どうすれば好いのだらう お嬢さん！

ぼくらはおそろしい孤獨の海邊で 大きな貝肉のやうにふるゑてゐる。

そのうへ情慾の言ひやうもありはしないし

これほどにもせつない心がわからないの？ お嬢さん！

輪廻と樹木

輪廻の曆をかぞへてみれば

わたしの過去は魚でもない 猫でもない 花でもない

さうして草木の祭祀に捧げる器物や瓦の類でもない。

金でもなく 蟲でもなく 隕石でもなく 鹿でもない

ああ ただひろびろとしてゐる無限の「時」の哀傷よ。

わたしのはてない生涯を追うて

どこにこの因果の車を廻して行かう

とりとめもない意志の悩みが あとからあとからとやつてくるでは
ないか。

なんたるあいせつの笛の音だらう

鬼のやうなものがゐて木の間で吹いてる。

まるでしかたのない夕暮れになつてしまつた

燈火をともし窓からみれば

青草むらの中にべらべらと燃える提灯がある

風もなく

星宿のめぐりもしづかに美しい夜ではないか。

ひつそりと魂の祕密をみれば

わたしの轉生はみじめな乞食で

星でもなく 犀でもなく 毛衣をきた聖人の類でもありはしない。

宇宙はくるくるとまはつてゐて

永世輪廻のわびしい時刻がうかんでゐる。

さうしてべにがらいろにぬられた恐怖の谷では

獣のやうな榛の木が腕を突き出し

あるひはその根にいろいろな祭壇が乾からびてる。

どういふ人間どもの妄想だらう。

曆の亡魂

四一四

薄暮のさびしい部屋の中で
わたしのあふむ時計はこはれてしまつた
感情のねぢは錆びてぜんまいもぐたらくに解けてしまつた
こんな古ぼけた曆をみて
どうして宿命のめぐりあふ曆數をかぞへよう
いつといふこともない
ぼろぼろになつた憂鬱の鞆をさげて
明朝は港の方へでも出かけて行かう。

さうして海岸のけむつた柳のかげで
首無し船のちらほらと行き通ふ帆でもながめてゐよう
あるひは波止場の垣にもたれて
乞食共のする砂利場の賭博でもながめてゐよう
どこへ行かうといふ國の船もなく
これといふ仕事や職業もありはしない。
まづしい黒鴉の猫のやうに
よぼよぼとしてよろめきながら歩いてゐる
さうして芥焼場の泥土にぬりこめられた
このひとのやうなものは
忘れた曆の亡魂だらうよ。

四一五

沿海地方

馬や駱駝のあちこちする
光線のわびしい沿海地方にまぎれてきた。
交易をする市場はないし
どこで毛布けつとを売りつけることもできはしない。
店舗もなく
さびしい天幕てんまくが砂地の上にならんでゐる。
どうしてこんな時刻を通行しよう

土人のおそろしい兇器のやうに
いろいろな呪文がそこらいつはいにかかつてしまった。
景色はもうろうとして暗くなるし
へんてこなる砂風すなかぜがぐるぐるとうづをまいてる。
どこにぶらさげた招牌かんばんがあるではなし
交易をしてどうなるといふあてもありはしない。
いつそぐだらくにつかれきつて
白砂の上にながながとあふむきに倒れてゐよう。
さうして色の黒い娘たちと
あてもない情熱の戀でもさがしに行かう。

大砲を撃つ

わたしはびらびらした外套をきて
草むらの中から大砲をひきだしてゐる。
なにを撃たうといふでもない
わたしのはらわたのなかに火薬をつめ
ひきがへるのやうにむつくりとふくれてゐよう。
さうしてほら貝みたいな瞳^まだまをひらき
まつ青な顔をして

かうばうたる海や陸地をながめてゐるのさ。
この邊のやつらにつきあひもなく
どうせろくでもない貝肉のぼけものぐらゐに見えるだらうよ。
のらくら息子のわたしの部屋には
春さきののどかな光もささず
陰鬱な寢床のなかにごろごろとねころんでゐる。
わたしをのしりわらふ世間のこゑごゑ
だれひとりきてなぐさめてくれるものもなく
やさしい婦人のうたごゑもきこえはしない。
それゆゑわたしの瞳^まだまはますますひらいて
へんにとうめいなる硝子玉になつてしまつた。

なにを喰べようといふでもない
妄想のはらわたに火薬をつめこみ
さびしい野原に古ぼけた大砲をひきずりだして
どおぼん どおぼんとうつてゐようよ。

海豹

わたしは遠い田舎の方から
海豹のやうに來たものです。
わたしの國では麥が實り
田畑がいちめんにつながつてゐる。
どこをほつつき歩いたところで
猫の子いつびき居るのでない
ひようひようといふ風にふかれて

野山で口笛を吹いてる私だ。
 なんたる哀せつつの生活だらう。
 樵せうや楡やうの木にも別れをつげ
 それから毛布に荷物をくるんで
 わたしはぼんやりと出かけてきた。
 うすく櫻の花の咲くころ
 都會の白つほい街路の上を
 わたしの人力車が走つて行く。
 さうしてパノラマ館の塔の上には
 ぺんぺんとする小旗を掲げ
 圓頂塔えんていとうや煙突の屋根をこえて

さうめいに晴れた青空をみた。

ああ 人生はどこを向いても
 いちめんめんに麥むぎのながれるやうで
 遠く田舎のさびさがつづいてゐる。
 どこにもこれといふ仕事がなく
 つかれた無職者むしやく者ののひもじさから
 きたない公園のベンチに坐つて
 わたしは海豹あひぎのやうに嘆息した。

猫の死骸

海綿のやうな景色のなかで
しつとりと水氣にふくらんでゐる。
どこにも人畜のすがたは見えず
へんになしげなる水車が泣いてゐるやうす。
さうして朦朧とした柳のかげから
やさしい待びとのすがたが見えるよ。
うすい肩かけにからだをつつみ

びれいな瓦斯體の衣裳をひきずり
しづかに心霊のやうにさまよつてゐる。
ああ浦 さびしい女！
「あなた いつも遅いのね」
ぼくらは過去もない未来もない
さうして現實のものから消えてしまつた。……
浦！
このへんてこに見える景色のなかへ
泥猫の死骸を埋めておやりよ。

沼澤地方

蛙どものむらがつてゐる

さびしい沼澤地方をめぐりあるいた。

日は空に寒く

どこでもぬかるみはじめじめした道につづいた。

わたしは獣けもののやうに靴をひきずり

あるひは悲しげなる部落をたづねて

だらしもなく 懶惰ちんたのおそろしい夢におぼれた。

ああ 浦！

もうぼくたちの別れをつげよう

あひびきの日の木小屋のほとりで

おまへは恐れにちぢまり 猫の子のやうにふるゑてみた。

あの灰色の空の下で

いつでも時計のやうに鳴つてゐる

浦！

ふしぎなさびしい心臓よ。

浦！ ふたたび去りてまた逢ふ時もないのに。

鴉

青や黄色のペンキに塗られて
まづしい出窓がならんでゐる。
むやみにごてごてと屋根を張り出し
道路いちめん 積み重なつたガタ馬車なり。
どこにも人間の屑がむらがり
そいつが空腹の草履わらじをひきずりあるいて
やたらにゴミダメの葱ねぎを喰ふではないか。

なんたる絶望の光景だらう
わたしは魚のやうにつめたくなつて
目からさうめんの涙をたらし
情慾のみたされない いつでも陰氣な悶えをかんずる。
ああ この噛みついてくる蠍さそりのやうに
どこをまたどこへと暗愁はのたくり行くか。
みれば兩替店の赤い窓から
病氣のふくれあがつた顔がのぞいて
大きなパイプのやうに叫んでゐた。
「きたない鴉め！ あつちへ行け！」

駱駝

さびしい光線のさしてゐる道を
わたしは駱駝のやうに歩いてゐよう。
すつはい女どもの愛からのがれて
なにかの職業でもさがしてみよう。

どことも知らない

遠くの交易市場の方へ出かけて行つて
馬具や農具の古ぼけたあきなひでも眺めてゐよう。
さうして砂原へ天幕を張り
懶惰な日にやけた手足をのばして
やくざな人足どもと賭博をやらう。

大井町

おれは泥靴を曳きずりながら
 ネギや ハキダメのごたごたする
 運命の露路をよろけあるいた。
 ああ 奥さん！ 長屋の上品な鼻^{かみ}ごも
 そのきたない煉瓦の窓から
 乞食のうす黒いしやつほの上に
 鼠の尻尾でも投げつけてやれ。
 それから構内の石炭がらを運んできて

部屋中いつはい やけに煤煙でくすばらせろ。
 そろそろ夕景^{せき}が薄^{うす}つてきて
 あつちこつちの家根の上に
 亭主のしやべるが光り出した。
 へんに紙屑がぺらぺらして
 かなしい日光のさしてるところへ
 餓兒共のヒネびた聲がするではないか。
 おれは空腹になりきつちやつて
 そいつがバカに悲しくきこえ
 大井町織物工場の暗い軒から
 わあッと言つて飛び出しちやつた。

吉原

高い板塀の中にかこまれてゐる
うすぐらい陰氣な區域だ。

それでも空地に溝がながれて
木が生え

白き石炭酸の臭ひはぶんぶんたり。

吉原！

土堤ばたに死んでる蛙のやうに

白く腹を出してゐる遊郭地帯だ。

かなしい板塀の圍ひの中で

おれの色女が泣いてゐる聲をきいた

夜つびとへだ。

それから消化不良のうどんを食つて

煤けた電気の下に寝そべつてゐた。

「また來てくんろよう！」

曇つた絶望の天氣の日でも

女郎屋の看板に寫眞が出てゐる。

大工の弟子

僕は都會に行き
家を建てる術を學ぼう。
僕は大工の弟子となり
大きな晴れた空に向つて
人畜の怒れるやうな家根を造らう。
僕等は白蟻の卵のやうに

巨大な建築の柱の下で
うじうじとして仕事をしてゐる。
蔓いぢかっぱさが翼を張りひろげて
夏の烈日の空にかがやくとき
僕等は繁華の街上にうじやうじやして
つまらぬ女どもが出してくれる
珈琲店の茶などを飲んでる始末だ。
僕は人生に退屈したから
大工の弟子になつて勉強しよう。

空家の晩食

黄色い洋燈の下で
家族といつしよに飯をくつた
魚も肉も野菜もなく 乾からびた米粒ばかりが残つてゐた。
がらんとした空家の中で
引つ越しの晩の出来事である。

郷土望景詩

中學の校庭

われの中學にありたる日は
艶たまめく情熱になやみたり。
怒りて書物をなげすて
ひとり校庭の草に寝ころびおしが
なにももの哀傷ぞ
はるかに青きを飛びさり
天日てんじつ直射して熱く帽子に照りぬ。

波宜亭

少年の日は物に感ぜしや
われは波宜亭の二階によりて
かなしき情歡の思ひにしづめり。
その亭の庭にも草木茂み
風ふき渡りてばうばうたれども
かのふるき待たればとありやなしや。
いにしへの日には鉛筆もて
欄干にさへ記せし名なり。

二子山附近

われの悔恨は酔ふたり
さびしく蒲公英の莖を噛まんや。
ひとり畝道をあるき
つかれて野中の丘に坐すれば
なにごとの眺望かゆいて消えざるなし。
たちまち遠景を汽車のはしりて
われの心境は動擾せり。

才川町

——十二月下旬

空に光つた山脈

それに白く雪風

このごろは道も悪く

道も雪解けにぬかつてゐる。

わたしの暗い故郷の都會

ならべる町家の家並のうへに

かの火見櫓をのぞめるごとく

はや松飾りせる軒をこえて

才川町こえて赤城をみる。

この北に向へる場末の窓窓

そは黒く煤にとざせよ

日はや霜にくれて

荷車巷路に多く通る。

小出新道

ここに道路の新開せるは
直として市街に通ずるならん。
われこの新道の交路に立てど
さびしき四方の地平をきはめず
暗鬱なる日かな

天日家並の軒に低くして
林の雑木まばらに伐られたり。
いかなぞ いかなぞ思惟をかへさん
われの叛きて行かざる道に
新しき樹木みな伐られたり。

新前橋驛

四四八

野に新しき停車場は建てられたり
便所の屏風とびらにふかれ
ペンキの匂ひ草いきれの中に強しや。
烈烈たる日かな
われこの停車場に來りて口の渴きにたへず
いづこに氷を喰はまむとして賣る店を見ず
ばうばうたる麥の遠きに連なりながれたり。

いかなればわれの望めるものはあらざるか
憂愁の曆は酔え

心はげしき苦痛にたへずして旅に出でんとす。
ああ この古びたる鞆をさげてよろめけども
われは瘖犬のごとくして憫れむ人もあらじや。
いま日は構外の野景に高く
農夫らの鋤に蒲公英の莖は刈られ倒されたり。
われひとり寂しき歩廊ほろの上に立てば
ああ はるかなる所よりして
かの海のごとく轟き 感情の軋きしりつつ來るを知れり。

四四九

大渡橋

四五〇

ここに長き橋の架したるは
かのさびしき惣社の村より 直として前橋の町に通ずるならん。
われここを渡りて荒寥たる情緒の過ぐるを知れり
往くものは荷物を積み 車に馬を挽きたり
あわただしき自轉車かな
われこの長き橋を渡るときに

薄暮の飢ゑたる感情は苦しくせり。

ああ 故郷にありてゆかず
鹽のごとくにしみる憂患の痛みをつくせり
すでに孤獨の中に老いんとす
いかなれば今日の烈しき痛恨の怒りを語らん
いまわがまづしき書物を破り
過ぎゆく利根川の水にいつさいのものを棄てんとす。
われは狼のごとく飢ゑたり
しきりに欄干にすがりて齒を噛めども

四五二

せんかたなしや 涙のごときもの溢れ出で
頬につたひ流れてやまず
ああ 我はもと卑陋なり。
往くものは荷物を積みて馬を牽き
このすべて寒き日の 平野の空は暮れんとす。

廣瀬川

廣瀬川白く流れたり
時さればみな幻想は消えゆかん。
われの生涯を釣らんとして
過去の日川邊に糸をたれしが
ああ かの幸福は遠きにすぎざり
ちひさき魚は眼にもとまらず。

利根の松原

日曜日の晝

わが愉快なる諧謔^{かいぎやく}は草にあふれたり。

芽はまだ萌えざれども

少年の情緒は赤く木の間を焚^やき

友等みな異性のあたたかき腕をおもへるなり。

ああ この追憶の古き林にきて

ひとり蒼天の高きに眺め入らんとす

いづこぞ憂愁^{ゆうしゅう}ににたるものきて

ひそかにわれの背中を觸れゆく日かな。

いま風景は秋晩^{あきばん}くすでに枯れたり

われは焼石を口にあてて

しきりにこの熱する 唾^{つば}のごときものを嚙^かまん^とす。

公園の椅子

四五六

人氣なき公園の椅子にもたれて
われの思ふことはけふもまた烈しきなり。
いかなれば故郷こきやうのひとのわれに辛つらく
かなしきすももの核たねを嚙かまむとするぞ。
遠き越後の山に雪の光りて
麥もまたひとの怒りにふるゑをののくか。
われを嘲あざわらけりわらふ聲は野山にみち

苦しみの叫びは心臓を破裂せり。

かくばかり

つれなきものへの執着をされ。

ああ 生れたる故郷こきやうの土を踏み去れよ。

われは指にするどく研とげるナイフをもち

葉櫻のころ

さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

四五七

監獄裏の林

監獄裏の林に入れば
囀鳥高きにしば鳴けり。
いかんぞ我れの思ふこと
ひとり叛きて歩める道を
さびしき友にも告げざらんや。
河原に冬の枯草もえ
重たき石を運ぶ囚人等

みな憎さげに我れをみて過ぎ行けり。
陰鬱なる思想かな
われの破れたる服を裂きすて
獸のごとくに悲しまむ。
ああ季節に遅く
上州の空の烈風に寒きは何ぞや
まばらに残る林の中に
看守のゐて
劍柄けんづかの低く鳴るをきけり。

山に登る 一六六
 孤獨 一六六
 田舎を恐る 一七〇
 贈物にそへて 一七三
 白い共同椅子 一七三
 雲雀の巢 一七四
 笛 一八四

青 猫 (前期)

内部への月影 一九二
 蝶を夢む 一九四
 腕のある寢臺 一九六
 青空に飛び行く 一九八
 冬の海の光を感じず 二〇〇
 灰色の道 二〇一

蟾蜍 二〇四
 その襟足は魚である 二〇八
 春の芽生 二〇八
 黒い蝙蝠 二一〇
 石竹と青猫 二一三
 海鳥 二一四
 眺望 二一六
 陸橋 二一八
 家畜 二一九
 野景 二二〇
 絶望の逃走 二二一
 僕等の親分 二二二
 涅槃 二二〇
 かつて信仰は地上にあつた 二二三
 まづしき展望 二二六
 農夫 二二八

波止場の煙 二四〇
 薄暮の部屋 二四二
 寢臺を求む 二四七
 強い腕に抱かる 二五一
 沖を眺望する 二四六
 商業 二四六
 群集の中を求めて歩く 二五九
 その手は菓子である 二六三
 青猫 二六三
 月夜 二六六
 春の感情 二六九
 野原に寝る 二七三
 蠅の唱歌 二七四
 恐ろしく憂鬱なる 二七六

青 猫 (後期)

憂鬱なる花見 二八四
 夢に見る空家の庭の秘密 二八七
 黒い風琴 二九〇
 憂鬱の川邊 二九三
 佛の見たる幻想の世界 二九五
 鷓鴣 二九八
 みじめな街燈 三〇一
 恐ろしい山 三〇四
 題のない歌 三〇六
 艶めかしい墓場 三〇八
 くづれる肉體 三一〇
 鴉毛の婦人 三一一
 緑色の笛 三一四
 寄生蟹のうた 三一六
 かなしい囚人 三二八
 猫柳 三三〇

憂鬱な風景	三三三
野鼠	三三四
五月の死びと	三三六
青空	三三七
輪廻と轉生	三三八
厭らしい景物	三三九
さびしい來歴	三四〇
怠惰の厝	三四一
閑雅な食慾	三四二
馬車の中で	三四三
最も原始的な情緒	三四四
天候と思想	三四五
笛の音のする里へ行かうよ	三四六
蒼ざめた馬	三四七
思想は一つの意匠であるか	三四八
顔	三四九

白い雄鷄	三五四
囀鳥	三五五
悪い季節	三五六
遺傳	三五七
自然の背後にかくれて居る	三五八
艶めける靈魂	三五九
花やかな情緒	三六〇
片戀	三六一
夢	三六二
春宵	三六三
軍隊	三六四
青	三六五
猫（以後）	三六六
桃李の道	三六七
風船乗りの夢	三六八

古風な博覽會	四〇〇
まどろすの歌	四〇一
荒寥地方	四〇二
佛陀	四〇三
ある風景の内殻から	四〇四
輪廻と樹木	四〇五
厝の亡魂	四〇六
沿海地方	四〇七
大砲を撃つ	四〇八
海豹	四〇九
猫の死骸	四一〇
沼澤地方	四一一
鴉	四一二
駱駝	四一三
大井町	四一四
吉原	四一五

大工の弟子	四二六
空家の晩食	四二七
郷土望景詩	四二八
中學の校庭	四二九
波宜亭	四三〇
二子山附近	四三一
才川町	四三二
小出新道	四三三
新前橋驛	四三四
大渡橋	四三五
廣瀬川	四三六
利根の松原	四三七
公園の椅子	四三八
監獄裏の林	四三九

校正について

一、「ふるへ」は全部「ふるふ」となつてゐますが、これは著者獨得の用法で、特に感じを出す爲です。

二、「食べる」が「喰べる」となつてゐる處がありますがこれも著者の特
に「むさぶり食ふ」と云ふ感じを現はす爲に用ひられたものです。

三、「かばいい」が「かわいい」となつてゐるやうに、著者獨得の用法は皆
右の理由によるものです。

萩原朔太郎詩集



昭和三年三月二十三日印刷
昭和三年三月二十五日發行

第一刷千五百部

定價六圓

著者 萩原朔太郎

刊行者 長谷川巳之吉

東京市芝區下高輪

刊行所 第一書房

電話東京六四二二三
電話高輪五六〇七

印刷者 萩原芳雄
製本者 橋本久吉

第一房刊行詩書

上田敏遺著	上田敏詩集	四六判七百六十頁	定價 三圓八十錢
西條八十著	西條八十詩集	新刊四六判七百六十頁	定價 五圓
萩原朔太郎著	萩原朔太郎詩集	新刊四六判七百六十頁	定價 六圓
堀口大學著	堀口大學詩集	新刊四六判七百六十頁	近刊
堀口大學著	詩集砂の枕	四六判七百六十頁	品切
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	再版五三二頁(二巻)	品切
日夏歌之介著	日夏歌之介詩集	全三冊(第一、二、三巻)	殘部六冊にて此珍本は永久に絶品となる賣價五圓以上
野口米次郎著	第一表象抒情詩	四六判七百六十頁	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第二表象抒情詩	四六判七百六十頁	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第三表象抒情詩	四六判七百六十頁	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	第四表象抒情詩	四六判七百六十頁	定價 一圓八十錢
野口米次郎著	人生詩集	四六判七百六十頁	近刊
三木露風著	三木露風詩集	四六判七百六十頁	定價 三圓八十錢

第一房刊行詩書

三富朽葉遺著	三富朽葉詩集	四六判八百四十頁	定價 四圓五十錢
堀口大學譯	譯詩集月下の一群	初版再版三版	いづれ縮刷刊行
堀口大學譯	譯詩集空しき花束	四六判七百六十頁	絶版
堀口大學譯	ヴェルレーヌ詩抄	四六判七百六十頁	品切
堀口大學譯	アポリネール詩抄	四六判七百六十頁	定價 二圓五十錢
茅野蕭々譯	リルケ詩抄	新刊四六判七百六十頁	定價 三圓八十錢
堀口大學譯	ジヤム詩抄	近刊	近刊
堀口大學譯	コクトオ詩抄	近刊	近刊
堀口大學譯	グウルモン詩抄	近刊	近刊

日夏歌之介譯
三浦逸雄譯

ダンテ神曲

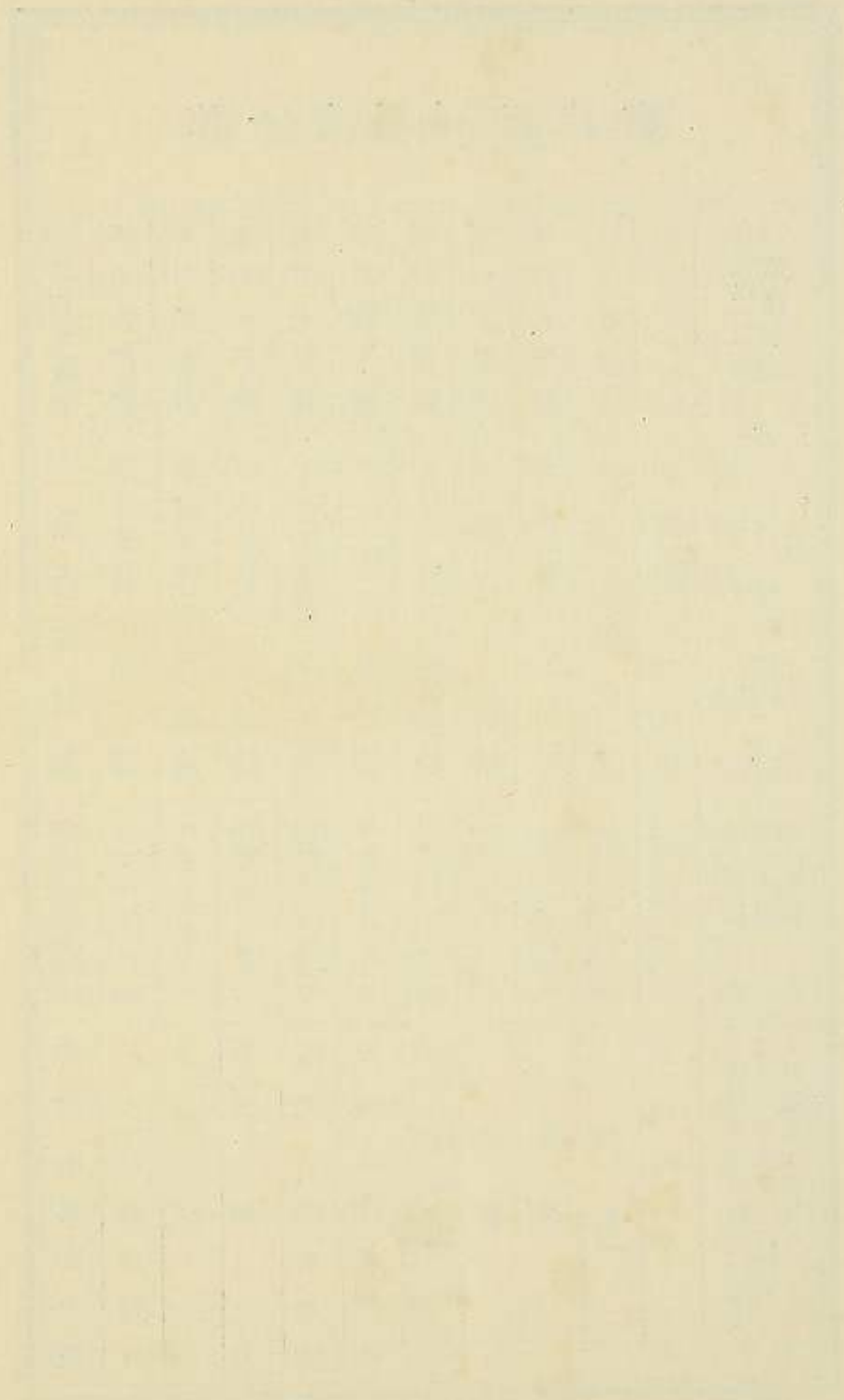
地獄篇
煉獄篇
天國篇

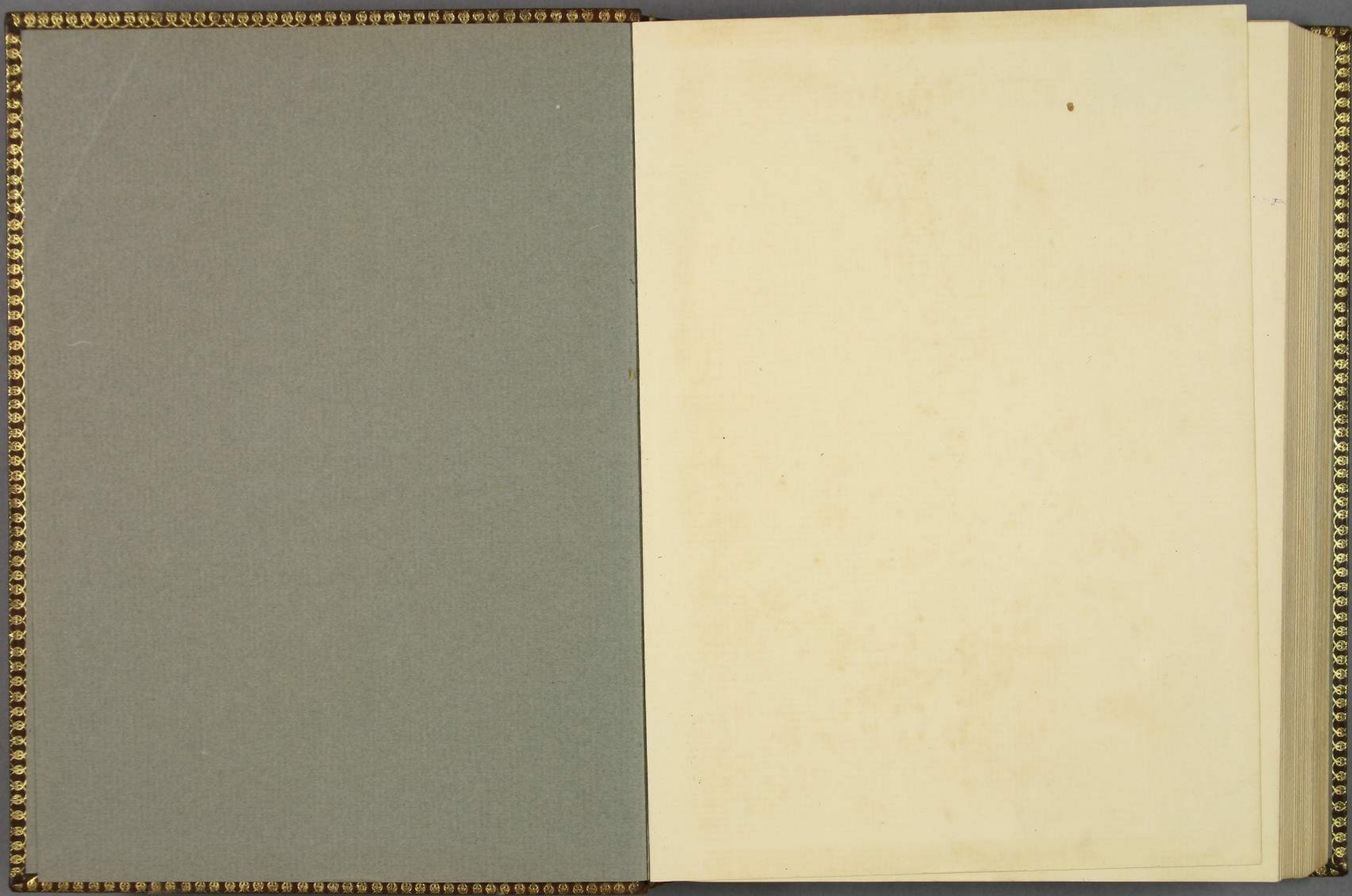
譯者と刊行者との終生の事業
なれば我等の生存中に完成す
れば大萬歳萬々歳なり

SHINKODO

店書堂港神

KOBE
MOTOMACHI. 1





159900

